
かんばせ

文屋カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かんばせ

【Nコード】

N5682U

【作者名】

文屋カノン

【あらすじ】

中学2年生のつぐみはある夜、酔った伯母貞子おばから、自分は強姦かんによって生まれたのだと聞かされる。事情を確かめたくても母はとうに死んでいる。貞子に育てられているつぐみは、のたうち回ってその事実を克服しようとするが、そんな折に、北海道の学校から越して来た一学年下の縫ぬいが、つぐみの部活に入部する。

つぐみと縫は姉妹のようにそっくりだと、周囲が騒ぐ。つぐみは嫌な予感がする。

一方、つぐみに打ち明けた事実をすっかり忘れていた貞子は、北

海道転勤から戻った昔の恋人に呼び出される。中学一年生の娘が、つぐみと同じ中学に入ったという彼と、貞子はまた会う約束をするが……。

出生の秘密（前書き）

第53回群像新人賞落選分を加筆訂正しました。

出生の秘密

自分が強姦によって誕生したと近山つぐみが知らされたのは、つい先程のことだった。つぐみを養育する近山貞子ちかやまさたこが、真夜中過ぎに酒にしたたかに酔っ払って帰宅した後に、口をすべらせたのだった。帰宅時のスーツ姿のまま化粧も落とさずに寝入ってしまった貞子を、つぐみは眺めた。のろのろとした動作で布団をかけてやると、つぐみはぼんやりと家の中を見渡した。

貞子の両親である祖父母が残してくれたこの家は、部屋数が五つあり、貞子と二人で暮らすには十分な広さだった。貞子の妹であるつぐみの母親は、つぐみを産み落とした後に亡くなってしまったし、三十五になった貞子は未だ結婚していない。

貞操の貞の字を取って名づけられてしまった伯母は、三十五になっても、貞操を捨て去ることができないのだろうか。そんなことを考えたこともあるつぐみだが、しかしつぐみは貞子が美しい女であることを知っていた。言い寄る男などいくらでもいるだろうに、貞子が結婚をしないのは、自分の存在があるからだろうか、つぐみは日頃から勘繰っている。

貞子はずぐみにとって良い保護者だった。つぐみは貞子に感謝しつつも、恨んだことなど一度も無かった。だが今夜の失言はあんまりだ。つぐみは二階の自室へ向かいベッドに置いてあった目覚まし時計を手に再び一階に戻り、ルージユの剥げかけた貞子の口元を眺めた。

素のままでも、まるで紅を差したかのように赤い、貞子の少し開かれた唇からのぞく粒ぞろいの歯列は真珠のように輝いた。その赤と白のコントラストは、ぞっとする程美しい。

この寒気がする程、美的な唇から漏れた忌まわしい秘密。つぐみは震える指でアラームをセットすると貞子の枕元にそれを置いた。

貞子の立てる健やかな寝息の中で、つぐみは

「体調が悪いので学校を休みます。連絡お願いします」

と広告の裏に走り書きした。紙の上で黒光りするインクの文字は、ぶるぶると震えていた。つぐみはそこに自分の動揺を見た。

書き直すべきだろうか、一瞬つぐみは考えた。が、すぐにそんなことをしている場合ではないと悟り、広告をテーブルに置いて階段を駆け上がった。早く嗚咽を自分に許さなくてはどうか、なつてしまいたいそうだった。

自室に入りベッドに潜り込むと、つぐみは声を殺しながら泣きじやくつた。拭っても拭っても、留まるところを知らない涙を枕に吸わせる。人体の七割は水分でできているという話を、つぐみは思い起こしていた。人にそれだけの水分が必要なのは、ひよっとしたら不意の悲しみに待機するためなのかも知れない。そんな気がした。

瞳が海になりそうな程、塩辛い涙を流しつくした拳句、明け方近くになってようやく眠りがつぐみの元を訪れた。けれどつぐみは夢の中でも苦悩と戦っていた。自分の体内に流れる忌まわしい血が、つぐみを捕らえていた。人体の七割を占める水分の中に潜むその血が、流した涙によって濃度を高めてしまったであろうことも。

「あたしの体内を駆け巡るこの汚らわしい血潮。お願い。いつそ猿の血と取り替えてしまつて」

舌をもつれさせながら叫びつつ、つぐみはまだ見ぬ父親を夢想した。写真でしか知らない母親の顔は、貞子によく似た美しい顔立ちだ。けれどつぐみは貞子にも母親にも似ていない。

父親の種は、自分の外見にだけ作用したのだろうか。そう思いながらつぐみは夢の中で姿身を眺めた。左右逆転の世界の中につぐみは父親の顔を見た気がした。けれどその映像を捉えようともかく内に、つぐみの浅い眠りは破られるのだった。

腫れ上がったまぶたを開くと、閉ざされた雨戸とカーテンによって作られた漆黒の闇があった。つぐみはベッドスタンドのスイッチを手探りで押したが、枕元に生まれたその灯にすぐさま身を固くした。明るさというものが、つぐみには酷く恐ろしく感じられた。慌

ててスイッチを切った。再び暗黒がつぐみの視野を満たしたが、今度はその暗がりがつぐみをおびえさせた。

光におののき闇に震える、ナチスドイツ支配下のユダヤ人のような気分になりながら、つぐみは意を決して、再度ベッドスタンドを点けた。照明が壁掛け時計をほのかに照らした。時計の針は九時を少し回っていた。

四時間は眠ったということだろうか。つぐみはゆっくりと上体を起こした。雨戸とカーテンを開け、部屋に陽光を取り込むことも、再び部屋中を暗闇で満たすことも選択できない。仕方なくつぐみは、チェストの前に立った。チェストの上には鏡が置かれドレッサー代わりになっている。鏡の中のつぐみは、赤く腫れぼったいまぶたをしていて、せつかくのくつきりとした二重まぶたが台無しになっていることが、薄明かりの中でも確認できた。

泣き明かした時間が、自分のかんばせに与えた無残な結果に気落ちしつつ、つぐみはベッドスタンドを点けたまま、部屋のドアを開けた。廊下に差し込む陽の光がつぐみをたじろがせたが、つぐみは歯を食いしばるとスリッパにぐいと足を入れて床に踏み出した。

階段にも台所にも初夏の陽射しが満ちていて、まるで自分の出生の秘密が、光の下に露にされたような落ち着かない心地になった。しかし家の中に人の気配が無いことが、幾分つぐみの心を救った。家人の不在の証明のように、食卓の上には

「オハヨー。元気印のツツタンが、具合悪いなんて珍しいねえ。何かあつたらメールして」

のメモが残されていた。

自分が昨夜残したメモ書きの下に書き加えられた、貞子の踊るような文字を眺めていたつぐみは、思わず

「何が『元気印のツツタン』だよ。両親に死なれて、伯母さんに引き取られてる女子中学生が、元気な訳ないだろ」

と苦々しくつぶやいた。この屈託の無い文章から察するに、貞子は昨夜の失言をすっかり忘れているのだ。全く酒というものは何て

便利な代物なのだろう。そして酒による失言は、こうして酒を禁じられていた未成年者へ降りかかった。

つぐみは虚ろな目で食卓の上を眺めた。空になったコーヒーカッブの隣に、シリアルのかけらと牛乳がこびり付いた器と、スプーンが置かれている。今朝は貞子が朝食当番だったはずだが、自分一人だったためコーヒーとシリアルで済ませたのだろう。

自分も何か食べた方がよいのだろうか、つぐみは考えた。何しろこんな体験は初めてだから、学校を休んだものの何をしたら良いのか分からない。

だがじつと使用済みの食器を眺めている内に、つぐみは胸がむかつてきた。一体何のために栄養をとるのか、つぐみにはよく分からなくなってきた。強姦により望まれずに生まれてきた自分。母親はあたしを墮ろせば良かったのだ。そうすれば今あたしはこんな気分には侵されることもなかったのに。

そう思うとまた涙が突き上げてきて、つぐみはひとしきり慟哭した。それは苦い涙ではあったが、貞子の不在のおかげで、声を上げて泣きじゃくることができることが少しありがたかった。

けれどそのありがたさは、高所恐怖症の人間が、ジェットコースターで叫ぶことを許された程度のありがたさでしかなかった。しかも自分の嗚咽が、自分のやりきれなさを改めて自分に教えているように、泣けば泣く程、自分が窮地に陥るかのような心地さえした。

つぐみは泣くのを止めると、ティッシュで顔を拭いた。泣き腫らした顔が擦れて痛かった。目が腫れていることを思い出したつぐみは、電気ポットでお湯を沸かすと紅茶のティーパックを二つ使って、紅茶を煎れた。

流した涙によって、体内の水分濃度が高まり血が濃くなってしまっていることを憎悪したつぐみは、紅茶を飲むことによる水分補給を考えたのだった。冷ました紅茶のティーパックをまぶたに乗せておくと、腫れがひくのだとつぐみに教えてくれたのは、他ならぬ貞子だった。

貞子の言葉によつてまぶたを腫らし、貞子の言葉によつてそれを解決しようとしている自分を奇妙に思いながら、つぐみは砂糖もミルクもジャムも入れずに、濃い紅茶を飲んだ。二つもティーパックを使ったせいかな、その味には酷くえぐみがあつた。

紅茶をすすりながら、なぜ母親は自分を生んだのだろうとつぐみは考えた。生きていれば問い詰めることもできたが、死んでしまつた者には何も言えない。望まれず強制された性行為の結果でも、女は生みたいと思うものなのだろうか。けれどそれは勝手な感慨だ。つぐみは考えた。母親はあたしのフォローをせずに死んでしまつた。無責任だ。

でも一番いけないのは、母親を犯した父親なんだろうと思つた。彼は今頃どこでどうしているのだろう。あたしという娘がいることを知りもせず、もしかしたらどこかで幸せな家庭を築いているのかも知れない。そう思うと憎悪が体中を貫いて、いてもたつてもいられなくなつた。

ごくごくと紅茶を飲み干すと、つぐみはティーパックが冷めていゝることを確かめ、それを皿に乗せて二階へと運んだ。自室に足を踏み入れると、ベッドスタンドが自分の枕を照らしているのが見えた。昨夜散々あたしの涙を吸い取り、すっかり塩辛くなつてしまつた枕。つぐみは枕が、自分の嘆きの結晶であるような気分になつた。ベッドに入り枕に頭を乗せると、つぐみは目を閉じてティーパックを左右のまぶたに乗せ、手探りでベッドスタンドを消した。常闇がつぐみを襲つたがつぐみは闇の中に先程の夢の残骸を探した。姿見の向こうにほんの刹那現れた父親の姿を、必死に追い求めた。

つぐみのどす黒い脳裏の中で父親は捕らえられた。こんな奴はとつぐみは思った。こんな奴は猛烈に苦しんで死ななければならぬのだ。

父親の体を鉄のベッドに寝かせると、つぐみはその手足に鎖を絡ませた。突然の出来事に恐怖に目を見開く父親を眺めながら、毎日時間をかけて、ゆっくりと殺してやったらどうだろうとつぐみは考

えた。

一日目は右手の親指の爪を剥ぐ。二日目には人差し指の爪を剥ぐ。そうして手足の爪を全部剥いでしまつたら今度は手足の指先を、一日一日ゆっくり時間をかけて第一関節から切り落とす。途中で死んでしまわないように栄養剤を点滴で打ち輸血を続けながら。血まみれの人間に、苦痛の軽減以外の最良の治療を施しながら、じつくりと確実に殺してやるのだ。

そんな想像をしていたら何だか甘美な気持ちになつて、つぐみは再びの眠りについた。父親を虐殺することがこんなにも心の慰めになるなんて、自分は最低の人間だと感じながら。

目覚めた時、つぐみは頬に当たるティーパックの感触にひやりとした。ベッドスタンドを点けると、いつの間にか落下していた二つのティーパックが、枕に茶色いシミを作っていた。つぐみは無感動にそれを眺めると、ベッドから降りてドレッサー代わりのチェストの前に立った。まぶたの腫れは見事にひいていた。

まぶたが腫れた場合の処置を、事前に教えてくれていた貞子に、ふと感謝の念が芽生えた。枕カバーを汚してしまったことについても貞子は小言一つ言わないに違いない。貞子は根の善良な親切な女だ。こんな生い立ちの自分を、何食わぬ顔で育ててくれる貞子に、つぐみは頭が下がる思いがした。自分だつたらいくら妹の子とはいえ強姦で生まれた子など世話したくない。それなのに貞子はよくも今日まで自分を育ててくれたものだ。

自分は立ち直らなければならぬのだらうと、つぐみは考えた。こんな忌まわしい出生の秘密を知った以上、もう生きていたくはないけれど、自殺などしてしまつてはこれまで育ててくれた貞子の顔に泥を塗ることになる。そしてつぐみは、貞子にもこの件を持ち出してはならないのだ。自分の失言を知った以上、貞子が罪悪感に駆られてしまつたらうことは疑いようが無いから。

誰かに全てを打ち明けて、泣いてみたいとつぐみは思った。けれど適当な人物は誰も思い当たらなかった。この問題はヘビー過ぎる。

つぐみはこの件を一生抱えながら口を閉ざしていなければならぬ。彼女の名はつぐみ。口をつぐんでいるようにと与えられた名前。

「何か、食べた？」

パジャマ姿のまま玄関に出迎えたつぐみに、シャツとパンツ姿にレジバッグをぶら下げた貞子が尋ねた。貞子はこの春、課長代理に昇格し銀行内でも私服着用になったため、通勤時の格好が、以前よりもオフィス向きになった。

ほんの数時間前までは、貞子に感謝していた。しかし一日家で無為の時間を過ごしていたつぐみには、貞子のいかにも外でばりばり働いてきましたといった雰囲気は煩わしく感じられた。そこで「食べてない」と不機嫌そうに答えた。栄養を取ったりしてどうするのだという気がした。強姦によって生まれてきた自分、父親の顔を知らず母親に死なれてしまった自分が。

「何にも食べてないの？　どんなに具合悪くしても食欲だけはあツツタンが」

貞子が切れ長の目を丸くした。

それは自分の生い立ちを知らなかったからです。強姦によって生まれた命だと知っていたら、どうして食べ物に喉を通りましょう。

つぐみが頭の中でつぶやいていると、貞子が

「うどんなら食べれる？　ツツタンの好きな鶏ガラスープ」

と問いかけながら鶏のガラをレジバッグから取り出した。五十円の表示が見える。安くて旨い鳥ガラスープ。

「いただきます」

「お、食欲出たか？」

いえ、伯母さんの好意を無にしたいだけです。こんな卑しい生い立ちのあたしのために食事を作って下さるんですもの。ごめんなさい。伯母さん。こんなあたしのことを汚らわしいとお思いでし

ようね。でも人情で、あたしのことを育てて下さっているのですよね。あたしなんて施設にやられてしまっても仕方ない身の上だといふのに。

ぼんやりとして返事をしないつぐみに、貞子は

「熱、計りなさい」

と体温計を渡した。つぐみは体温計をわきの下に挟みながら

「夏風邪なんてひくのは、馬鹿だけでございます」

と答えた。

「なあに、夏風邪ひいたから自分は馬鹿だと思って落ち込んでる訳？」

「いえ、あたしは元々馬鹿でございます」

「熱計りながら喋るんじゃないの。正確に計れないよ」

伯母さんが話しかけてきたくせにとつぐみはふくれたが、すぐに自分は、ふくれる資格など無いのだと思った。こんな卑しいあたしに体温計を貸して下さるなんて、それだけでもったいない話でございます。

貞子が自室に行つて、バッグを置き腕時計やアクセサリ類を外して戻つて来た時、ピピツと体温計が鳴った。取り出すと液晶は37度5分を示していた。貞子が覗き込みながら

「少しあるね。やっぱり風邪じゃないの」

と弓なりの眉をひそめた。

「風邪ではなく、血液が逆流したんだと思います」

「何でツツタン今日、ですます調なの」

「あたしにふさわしい言葉遣いはこれだと、気付いたのでございます」

「変な子ねえ。まあふざけてる余裕があるんならいいけどね」

貞子はそう言いながらエプロンを着け、朝食に使った食器を洗い、うどん作りに取りかかった。つぐみは食卓の椅子にもたれながら、そつえばこんな風にして伯母の姿を眺めることは、久しく無かつたなと考えた。

近山家では家事を分担している。基本的に食事作りは当番制だが、掃除洗濯は手が空いた者が行なう。とはいえ圧倒的に休日が多いのはつぐみの方だから、学校が休みの日は主につぐみが行なう。

役割分担があるとはいえ、片方が家事をしている間、もう片方がぼんやりしているなどということはない。ぼんやりしている時間があれば二人で家事を行なうし、時間が無ければ、それぞれ自分の用事を済ます。

だからこんな風に、食事を作る貞子の姿をつぐみがぼんやりと眺めるのは、滅多に無いことだった。つぐみは新鮮さを感じつつもこれが母親だったら良かったのにと思った。

母親だったなら問い詰めることができる。なぜ生んだのだと問い詰めることができる。だが相手は伯母だ。つぐみは伯母に対しただひたすら申し訳ない思いを抱くしかない。

強姦というものを考えてみた。つぐみが強姦という行為を知ったのは小六六の頃、セックスという行為を知ったのは小五の頃だった。セックスという行為を初めて知った時は、ひたすら気色悪かった。自分もそんな行為を経て生まれてきたとは驚愕だった。しかも母親の股を通って生まれてきたとは。

けれどセックスを知った後も、世の中は相変わらずいつも通り進んでいた。こんな驚愕の事実を前にしても、当然のように世の中が進んでいるのを見るにつけて、つぐみは自分が間違っているのだろうかと考えた。

小学生の頃、プールを気持ち悪いと思ったこと。皆のお尻が浮かぶプールに顔を浸けるのが嫌だと思ったこと。けれど周囲に誰もそんなことを言う者がいなかったため、自分がおかしいのだろうと思いい、我慢してプールに入ったこと。その内気持ち悪いと感じていたことを忘れ慣れてしまったこと。

だからセックスも我慢していれば、その内慣れるものなのだろうと思ったこと。そして今現在自分は、処女でありながら慣れてしまったこと。

だが強姦という行為を知った時の、打撃は忘れられなかった。好きな相手とさえ抵抗のあるあんな行為を、力づくで強引にやるうとしてくる男がいるなんて。全く何ていう世の中だろう。

もし神様が本当にいるのなら、どうして女の力を弱く造ったのだらうと、つぐみは素朴な疑問を持った。性的な欲望が強いのは男の方なのに、腕力まで与えられているからこういうことが起きるのだ。もし神様がいるのならあまりに酷いと思う。神様はあたしの、そして女の味方じゃないのだと思う。

不意につぐみが、引きつけを起こしたような声で泣き始めると、貞子がぎよつとした顔で、「どうしたの」と振り向いた。

「伯母さんは何であたしを育ててるの。実の子でもないのに」

泣きじゃくるつぐみにうろたえながら、貞子は

「いや途中までは、おじいちゃんおばあちゃんが育ててたじゃん？ その後おじいちゃんたちが死んじゃったから、そのままこのうちで育ててるんだけど」

と答えた。本当はつぐみがそんな返答を求めている訳ではないことは分かっていたが、しかしでは何と答えれば良いのか、貞子にはよく分からなかった。

「おじいちゃんたちが死んだ時点で、あたしのことなんか、施設に入れれば良かったじゃない」

今や涙を流し慣れてしまった頬に、大粒の涙をこぼすつぐみに、貞子はティッシュを箱ごと渡すと

「なあにもしかして、第二次反抗期？」

と尋ねた。

「何それ」

「だから第二次反抗期よ。ああ良かったあ。ツタン良い子だからさあ。ほら伯母さんもホントの母親じゃないし、ツタン第二次反抗期を迎えられないんじゃないかって思ってたんだけど迎えてんじやん。いいいいよその感じ。何でも言いたいこと言っちゃいなよ」

「だから何で、おじいちゃんたちが死んだ時点であたしを施設に入

れなかったのよ」

話が変わる方向へ向いていることは分かっていたが、つぐみはそれで良いと思っていた。これを貞子が、第二次反抗期だと誤解するならそれで良い。反抗期を歓迎される程、自分は貞子に愛されているのだから。昨夜の貞子の失言を口にできない以上、昨夜の貞子の失言で自分が参っている以上、何らかの形でつぐみは爆発することが必要だった。

貞子は涙でぐしゃぐしゃになったつぐみの顔を覗き込むと「ツツタンは、施設に入りたかった？」

と尋ねた。「入りたくない」とつぐみは答えた。

「でしょ。施設って何かと行き届かないもんね。だからツツタンはそのままうちで育てることにしたの。ツツタンのパパの方のおじいちゃんたちはとくに亡くなってたしね。あちらは一人っ子だったから、あちらにはツツタンのおじいさんもおばさんもないし」

「でもあたしがいるせいで、伯母さん結婚できないんじゃないの」「どうして？ 連れ子がいても再婚する人なんていっぱいいるじゃない。その上こちらら初婚なのよ」

貞子はおどけて見せたが、しかしつぐみの言葉にぎくりとした。確かに貞子が結婚をしないのは、つぐみの存在も理由の一つだった。

妹の正子まこが強姦により妊娠し、その上子供を生むと言い出した時、貞子は言葉にならない程の衝撃を受けた。正子には「強姦だったことはお父さんとお母さんには黙ってて頂戴。好きな人の子供を妊娠して一人で生むんだってことにして頂戴」

と頼まれていたから、そのことは貞子しか知らない。ひと悶着あった後、両親は出産を許したけれど、出産に耐え切れず正子が死んでしまっただけからは、やはり生ませたことを後悔していた。そしてあの時中絶に反対しなかった貞子がつぐみの世話をすることは、両親からの無言の圧迫があったからに他ならない。

例え妹の子とはいえ、強姦により生まれてきた子供を可愛がるこ

とができるだろうか。当初はそんな不安が胸をかすめたものの、実際子供が生まれてしまえば、そんなことを考えている余裕は無くなつた。銀行員として働く貞子は、昼間は両親につぐみの世話を任せていたが、帰宅してからは戦場だった。

何せ生まれたての赤ん坊は、四時間ごとに乳を欲しがる。その他にもオムツが濡れたといつては泣き、ベビー服のゴムが食い込んだといつては泣く。

目の前に何も知らず泣き続ける赤ん坊を見ては、貞子はあれこれ考える前に、赤ん坊の世話をしなければならなかった。哺乳瓶を宛がいミルクをやると、つぐみは黒々と濡れた瞳で貞子の目をじつと見詰めた。ついテレビなどに気を取られていると、つぐみはこつちを見ると哺乳瓶から口を離して泣き出した。

こんなにもストレートに、自分を愛してくれとアピールする生き物に出会つたのは、貞子は初めての経験だった。そうよね。お前はママを亡くして寂しいのよね。本当なら今頃ママの乳房を吸っていたはずなのよね。

貞子は次第につぐみが愛しくなりだした。正子の代わりにこの世にやってきた、小さくて湿っぽくて良い匂いにするフワフワした生き物。出生がどうであれ、この子を憎むなんてできない。

正子に外見が似ていたせいだろうか。つぐみは貞子によく懐いた。つぐみは顔立ちが正子に似ていなかったけれど、ふとした時に見せる表情やしぐさが正子によく似ていた。死んだ正子の分まで貞子はつぐみを可愛がった。つぐみの出生の不幸すら、むしろ貞子にとつてはつぐみを愛する要素になっていた。こんな不幸な生い立ちのつぐみを、少しでも幸せにしてやらなければと思つた。

結婚を申し込む男は何人もいたが、貞子はその気になれなかった。自分が人並みの家庭をつくることによって、つぐみの不幸が浮き彫りになってしまうことが怖かった。幸せな結婚をしなくても、強姦によつても子供は誕生してしまうのだ。そして母親が子供を産んだ直後に、死亡してしまうケースも。

そんなケースを真近で見えておきながら、その対象であるつぐみに、自分の幸せな結婚生活や、それによって授かるであろう子供を見せることが酷に思えた。だから貞子は結婚をしなかった。

けれどそれをつぐみに言っただけでは負担になるだろう。だから貞子は、傍目には独身主義者を気取っていた。だがつぐみも年頃だ。三十も半ばだというのに結婚をしない貞子に対し、自分の存在が重荷なのではないかと考え始めたようだ。

それが証拠につぐみは

「連れ子がいる人なんて珍しくないけど、あたしは伯母さんの姪じやん。相手が姪っ子連れなんて特殊でしょ。そのせいで伯母さん結婚できないんじゃないの？ だったらあたしなんて施設に入れてくれていいんだよ」

と言い出した。

「でもツツタン、施設嫌なんですよ」

「嫌だけど、伯母さんがあたしのせいで結婚できないならそっちの方がもつとやだ」

「嫌だ。ツツタンのせいじゃないわよ。伯母さんの男運が良くないの。伯母さんあんまりモテないのよ」

答えながら貞子は、そうだわたしはモテないと考えていた。プロポーズしてくる男が何人かいたからといって何だろう。結局結婚したいとまで思い詰めた相手からは、何の約束ももらえなかったではないか。たいして好きではない男から、何度かプロポーズされたからといって何だろう。つぐみの存在が無くて、ひよっとしたら自分は結婚をしなかったのではないだろうか。

そんなことをうつすらと考えていると、つぐみが

「嘘。伯母さん美人なのに」

と疑わしい目をした。若いということは何て単純なんだろうと、貞子は微笑ましく思った。

「あのね美人っていうのは案外モテないんだよ。近寄りがたいの。ツツタンみたいな可愛い系の方がモテるの」

「そうなの？」

「そうだよ。ツツタンにも今に分かる。これからいっぱい色々な恋をしてそして分かる。美人っていうのは傍から見ると、幸福じゃないんだってことがね」

それはあたしの母親のことを言っているんだろうかと、つぐみは考えた。もし母親が美人じゃなかったら、誰も強姦なんてしなかったかも知れない。美人が受けるべき幸福を何一つ受け取らない内に、二十歳の若さで死んでしまった哀れな母親。

つぐみは母親を悼みながら、ふと

「ねえあたしって、パパに似てる？」

と尋ねた。貞子は一瞬ぎくりとしたが

「そうね。ツツタンは顔は正子似じゃないし外見はパパに似たかな」と答えた。

つぐみには両親は結婚していたと、つぐみが生まれる前に、父親が事故で他界してしまったと伝えてあるために、そう答えるのが無難だと貞子には思われた。

母親を強姦した男が、あたしに伝えたかんばせが、伯母さんの言う通り今後、男を引き付けるとしたら、それは何て皮肉なことだろう。つぐみが物思いにふけていると不意にキッチンタイマーが鳴り出した。どうやらうどんが茹で上がったらしい。

鶏のガラで出汁を取り、ワカメとネギを乗せたうどんをすすりながら、しばし二人は無言だった。つぐみはもつと貞子に聞かねばならないことがある気がした。けれどこれ以上何を聞いたら良いのか、よく分からなかった。

その内固定電話が鳴り出した。ケータイが主流になった昨今、固定電話が音を立てるのは珍しい。

貞子は久しく持ち上げていなかった子機を取ると

「あら、久し振りねえ」

と意外そうな声を出した。誰なのだろうとつぐみは思ったが、すぐに好奇心の扉は閉ざされた。どこの誰が久方ぶりに受話器の向こ

う側に現れようと、自分が強姦によって生まれたという事実の前には、どうでも良いことに思えた。

そんなつぐみの思いも知らず、貞子は子機を握りながら

「自宅に電話してくるなんて、誰かと思っただわ」とか

「そうよね。あの頃はまだケイタイなんて無かったものね」

などと華やいだ声で会話を交わした後、子機を置いて、せかせかとつぐみの元へやって来た。その頬は先程の通話によってバラ色に輝いていた。

「伯母さんちよつと出かけて来るけど、いいかな」

その問いかけに、つぐみは不審を覚えた。貞子は友人や知人と会う際は事前に約束をしておくタイプだ。もしかしたら本当は突然の誘いに乗りたい日もあるのかも知れないが、中学生の自分を残して夜間に再び外出をすることが引け目であるらしい。だから貞子は平日の予定は前もってつぐみに告げ、帰宅前にこなしている。

そんな貞子が、昨日メール一通で帰宅が遅くなることを告げ、拳の果てに真夜中過ぎに帰って来たこと事態が珍しいのに、その翌日に更に出かけようとするのは、一体どういう訳だろうか。

だがつぐみは

「ご飯も食べたし、平気」

と興味無さそうに答えた。自分が強姦によって生まれたという事実を知った今、貞子が珍しい行動を取ろうとどうしようと、そんなことはどうでも良いことに思えた。

「熱そんなに無いんだし、気力あるならお風呂入るときなさいよ。食器はそのままでもいいから」

「気力無いから、お風呂は入らない」

断じて入ってなどやるものかと決意しながら、つぐみは答えた。

微熱の際は入浴して発汗を促した方が体に良いことは知っていたが、今のつぐみにとっては、そんなことはどうでも良いことだった。昨夜の貞子の衝撃発言によってショックを受けたのだから、今日はあ

りとあらゆることをサボってやるのだ。

つぐみが積極的に怠惰になっていると、貞子は

「じゃあ、おとなしくしてなさい。明日も学校休むの?」

と優しく尋ねた。病気の姪を一人置いて夜になってから外出することが、貞子は心苦しかった。

「起きた時の、調子で決める」

「じゃあなるべく、早く寝なさい」

そう言い残すと、貞子は洗面所で歯を磨いた。外出先で何かをつまむことになるだろうことは分かっていたが、今夜はどうしても口腔を清潔にしてから出かけたかった。

歯のブラッシング音が口をすすぐ音に変わると、つぐみはようやく立ち上がり、貞子と入れ替わりに洗面台に立って、歯を磨いた。

今日はありとあらゆることをサボってやるつもりだったが、このまま自室に引っ込んだりしては、貞子に歯を磨けとどやされることは必至だった。貞子は優しい女ではあるがしつこくは厳しい。

しかしただ歯を磨くというただそれだけの行為に、勇気を持つことが必要な程、つぐみは疲れていた。つぐみはいい加減に歯ブラシを使うと、そそくさと自室に向かった。

隣の貞子の部屋から、がさごそ音がしていた。おそらく食事で落ちたルージユでも塗り直しているのだろう。つぐみは照明を消すとフローリングの床にぺたんと座り、ベッドに上半身をもたれさせた。化粧直しの時間がいつもより幾分長いような気がしたが、しかしそんなことはどうでも良いことに思われた。

ようやく

「じゃあツツタン、伯母さん行くからね」

の聲がかかり、つぐみが

「はあい。おやすみなさい」

と返事をする、パタパタと階段を駆け下りる音の後に、ボタンと玄関のドアを閉める音と施錠音が響いた。同時に学習机の上からメールの着信音が流れてきた。

つぐみが半身を起こしてそちらを見やると、闇の中で、ケータイががちかちかと点滅していた。つぐみは照明も付けずにケータイを手に取りそれを開いた。学校を休んだことを心配した級友たちからのメールが入っていた。部屋を出ていた間にも、すでに二件着信していた。そういえばいつものあたしなら、部屋を出る時にもケータイを離さないのにと考えながら、つぐみはメールを読んだが、すぐにパタンとケータイを閉じた。

画面に散りばめられた顔文字や絵文字に、果てしない距離を覚えた。自分が知ってしまった事柄を、どうしてそんな浮かれた文字で伝えることができるだろうか。

彼女たちはこのような文字を使う浮かれた世界にいるのだなと、つぐみはぼんやりと思った。大丈夫？ とか、心配だとか、ツグミンがいないとつまんだとかの、言葉の後に添えられた泣き顔やら涙マークやらが、何だか空々しく感じられた。涙も枯れ果てた後はこんなものを使う気にも見る気にもなれないのだと初めて知ったけれどつぐみも、ついこの間までは彼女たちの世界にいたのだ。メールに若々しい文字を散りばめていたのだ。

昨日の今頃はまだ、向こう側の世界にいたのにとつぐみは懐かしく回想した。向こう側の世界に戻りたかった。そして無邪気に、風邪でダウンしたとギャル文字を打ち込み泣き顔を添えてみたかったけれどそんな簡単な嘘を送信する作業すら億劫で、つぐみはごろりとベッドに寝転がり頬を枕に付けた。干からびた紅茶の匂いが鼻を刺した。

ティーパックを使う程に、まぶたが腫れる程に、自分は涙を流したのだなとつぐみは思い起こした。昨日の今頃はこんなことになるなんて夢にも思わなかったのに。

強姦だとか何とか、全て嘘だったら良いのと思う。いつそあたしの中では嘘だったということにしてしまおうか。伯母さんはきつと酔っ払って、ありもしないことを口にしたのだ。

自分を騙しながらつぐみは眠りについた。無かったことだと思え

ば良い。そうすれば昨日までの日常が、返ってくるはずだと信じながら。

つぐみが眠りに落ちる頃、貞子は一件のバーの前にいた。このバーに来るのは十四年振りだ。以前と比べて外装がすすけているように見えるけれど、暗がりだからよく分からない。

この扉の向こうで貞子を待つ男の姿も、十四年の垢をかぶり、すすけてしまっているのだろうか。それとも暗い照明が男の垢を隠すだろうか。

思い切ってドアを開けると、薄闇の奥に目当ての男の姿が見えた。シーカーを振りながら「いらっしやいませ」とつぶやくバーテンに、軽く会釈をし、男の待つ奥のボックス席へと進む。バーテンは若い男だ。以前の初老の男はどこへ行ったのか。息子かも知れない。ボックス席で煙草をくゆらせていた男が

「ここ、すぐ分かった？」

と微笑みながら尋ねた。貞子は腰を下ろしながら

「周りが随分変わっちゃったから、戸惑っちゃった」

と答え店内を見渡した。

客は他に二組。内装は変わっていないように見えるがメニューは新しくなっている。貞子は少し迷った後ジントニックを注文した。

「相変わらず、ジントニックが好きなんだね」

と男はつぶやいた。声は以前と変わらず染み入るようなバスだ。年相応には老けたけれど、かえって苦みばしった魅力がかもし出されている。

「相変わらず、ミックスナッツも好きよ」

と貞子は答えながら、卓上のミックスナッツをつまんだ。わたしは老けたと思われるだろうか。当時は二十一だった。美の絶頂期にいたあの頃と同じカクテルとつまみを愛する自分。

何だか滑稽な気分になつて貞子が頬を緩ませると、男は突然「俺は相変わらず、貞子が好きだよ」

と言つた。その瞬間貞子は、自分が十四年もの時をタイムスリップしたような気分になつた。あああの頃に帰れたら。自分は若く美しく隣にはこの男がいた。正子はまだ強姦などされていなかった。あの頃に帰れたら。

けれど貞子はくすりと笑うと

「そんな言葉は、結婚指輪をしたまま言つてはいけないのよ」

とたしなめた。席に着いた時から気付いていた。男の左手の薬指に光るリング。男は結婚している。驚くには当たらない。彼はもう四十なのだから。

ところが男は指輪には目もくれずに

「妻は、亡くなつたんだ」

と淡々と答えた。

「いつ？」

「半年前かな。病気でね」

「奥さんが亡くなつても、結婚指輪つて外さないものなのね」

少しガツカリしながら貞子は答えた。男が北海道に転勤になつたことをきつかけに、貞子は男と別れた。男は転勤先で妻を娶りそしてやもめになつた。それでも相変わらず男の薬指にはまる指輪に、貞子は軽く嫉妬した。

「娘の目があるからね。指輪はおいそれと外せない」

「お子さんは、お嬢さんだけ？」

「ああ中学一年だ。北中に転入することになつた」

つぐみと同じ中学校だと貞子は思い当たり、ふと男の娘の姿を見てみたいと思つた。娘は父親似だろうか。それとも母親似だろうか。そんなことを考えていると男が

「貞子は指輪は？」

と尋ねてきた。

「見ての通りピンクィーリングだけよ。この指には一度も何もはめた

「ことありません」

そう言って貞子が自分の左手の薬指を指すと、男は

「その割には、夫がいるかのような指先だ」

と貞子の手元を見詰めた。

「そう?」

「マニキュアはしてあるけど短くて平たい。ネイルアートもしていない」

気付くと男は貞子の白い手を握り、一本一本の指を愛撫し始めた。指先からぱあつと男が流れ込んできたような気がして、貞子は胸をドギマギさせた。こんな気分を味わうのはどれくらい振りだろうか。確かなのは、それがいつのことだったのかももう思い出せない程の時間が流れたということだけだ。

貞子は手を引っ込めたものかどうか迷いながら

「実家は出ていないけれど、母が亡くなったの。姪と二人で暮らしてるから家事をしなきゃなんないのよ」

と上ずった声で答えた。

「お母さんが?」

「ついでに父と妹も。妹が残した子が今十三歳。出産もしてないのに未婚の母になった気分よ」

「妹さんのご主人は?」

男の質問に貞子は一瞬沈黙した。そうだこれなのだ。貞子が男に心を開けない理由は。つぐみが強姦によって生まれた子供であることを、貞子は誰にも言ったことがない。今まで付き合った男にも誰にも。

言うべきではないのだろう。それを言うことによって、つぐみが汚されてしまう気がする。けれど作り話を披露する度に小さな罪悪感を貞子は覚える。わたしは男に嘘をついていると貞子は思う。本当は何もかも洗いざらいぶちまけて、わたしの心を救って欲しいのに、わたしは心を閉ざさざるを得ない。

そう思うと、男との間に流れている時間も何もかも疑わしくなっ

てしまつて、貞子は自分が男を愛しているのかどうかさえ分からなくなる。だから貞子は男たちと別れてきた。

そうだ、そうなのだ。わたしはつぐみのことが無ければやはり結婚していたかも知れないのだ。目の前にいるこの男にだけ心を開けたのは、正子が強姦される前に付き合っていたからであつて、この男が特別な訳じゃない。

ふと幻想から解き放たれた気分になつた貞子は、男からそつと手を離すと

「姪の父親は姪が生まれる前に死んだの。父親の両親は最初から行方知れずで。わたしのとこ以外に行くとこ無いのよ、あの子」

と静かな口調で答えた。深刻な話になつたせいか、貞子が手を引つ込めたことを男はたいして気にしていないようだった。

「俺がいない間に、随分苦労してたんだな」

「たいした苦労じゃないわ。姪が小学生の内は両親は健在だったし、わたしはその間は片手間に世話してただけだもの。わたし一人で姪を育て始めたのは、ここ一年くらいのことだし」

「それじゃ貞子が結婚しなかったのは、姪っ子の存在があつたからつていう訳じゃないんだ」

どう答えれば良いのだろうと貞子は再び沈黙した。

貞子が結婚をしなかったのは、つぐみの存在にも理由がある。男女が愛し合わなくても強姦という手段でも誕生してしまう生命。そんなものを真近で見えていたら、結婚をして子供を生むという普通の行為が、何だか分からなくなつてしまつたというのも事実だ。悲しいことに愛が無くても、子供というものは誕生し育つてしまう。

もっとも祖父母や自分の愛情が、つぐみを育てたことに他なら無いのだが、何というか貞子は、いわゆる普通の出産が特別なことに見えるのだ。何か自分からは遠い特別な出来事のような。

その時男が、貞子のグラスが空になりかけていることに気付いた。男はバーテンに、ジントニックのおかわりと自分のために水割りをお願いすると、再び貞子の切れ長の瞳を見詰めた。

貞子は何やら甘い気分になって

「二十一の頃に付き合ってた人が忘れられなかったから、結婚しなかったと言ったら信じる？」

と媚びを含んだ口調で尋ねた。お互いを嫌いになった訳ではない。ただ距離によつて引き離された男との別離は、甘い思い出になつて貞子の心に根付いていた。

「信じたいけど信じられないな。君みたいな美人が」

「やめてよ。わたしの外見だけに注目する他の男たちみたいなことを言うのはやめて。大抵の男にとっては、わたしの外見だけに意味があるのよ。皆わたしの内面を知ろうとしてくれない。わたしはずっと人形みたいに見られてきたのよ。そして失望を繰り返している内に三十五よ。散々人形扱いされた人間が年を取るつて惨めなものよ」

「そうか俺だけだったのか。君の顔だけじゃなく中身も求めた人間は」

そうよと貞子は思った。この人と別れた後、何人かと付き合い合つて美人だと褒め称えられて有頂天になつていたけれど、彼らはわたしの外見を絶賛するだけで、決してわたしの内面に入り込んでくれなかった。

すると男は

「でも無理無いと思うぜ。お前は美人すぎる」

と突然親しげな口調になった。貞子は再び十四年前を思い出した。友達の紹介で知り合つて何度か逢瀬を重ねる内に、少しずつ変化していった男の口調を思い出した。

そんな些細なことですら、あの頃どれだけ嬉しかっただろう。付き合い合つてもいつまでも自分をさん付けて呼ぶ男もあつた中、時には下卑た言葉遣いをするこの男に、どれだけ自分の心は開かれただろう。今、男は時間を短縮してあの頃を再現している。何のために？

またわたしの心を開くために？ まさか。あれから十四年もの年月が流れているというのに。

「『美人すぎる』なんて……」

と貞子は言いかけた。無意識が貞子を、謙遜を美德とする日本人であることを伝え、否定するべきだと思った。しかし過去にも何度も、人に同じことを言われたことはあった。男もそれを承知の上で言っているのかも知れなかった。それにも関わらずおざなりに否定しては、心を閉ざしていると思われるしまいそうだった。男はこうして砕けた口調を使い始めているというのに。

その時、男が

「いやホントに、お前は美人過ぎるんだよ」

と責めるような声色で、貞子の惑う瞳を見詰めた。何やら欠点を指摘されているような気分になって貞子は男を見詰め返した。わたしを救って欲しいと思った。欠陥を持つわたしをどうか助けて欲しいと思った。

男は再び貞子の手を握ると

「目が覚めるような美人なんて言い回しがあるけどさ、現実目は目が覚めるような美人なんて滅多にいねえんだよ。目が覚めるようなブスなら案外いるけどな」

とにやりと笑い再び貞子の手を愛撫し始めた。貞子は手を男に委ねたまま、そうかも知れないと考えた。

「その現実の中で、お前は例外的な目が覚めるような美人なんだよ。そんじよそこらの美人とは訳が違う。普通の男の目の前に例外的なお前が現れたら、そいつらがぶつたまげて、お前の外見ばっかに気イ取られたって無理ねえよ」

男の指が貞子の手の上を這い回る。言葉遣いは下品なのに、どうしてこの男の指使いはこんなにもソフトで優しいのだろうと思う。固く握り締められていた白い手が少しずつ解きほぐされていく。さつき男が「夫がいるかのような指先だ」と指摘した、マニキュアを施しただけの短い爪と爪の間が、じよじよに開いていく。

だったらあなたは、自分が普通の男じゃないって言うの。自分は特別な男なんだって言いたい。そんな思いが貞子の頭をかすめた。

その時バーテンがテーブルの上にジントニツクを置いた。貞子は左手を男の自由にさせたまま、右手でグラスを持ってジントニツクをあおった。アルコールにしびれた脳が心地好い方の答えに貞子を押し流した。目の前にいるのは普通じゃない特別な男。例外的な美人のわたしには他に選択肢が無いと。

男は言った。

「これからも連絡していいか」

「いいわ」と貞子は答えた。北海道転勤の間、妻を娶っていた男。それが何だというのだ。わたしにも恋人は何人もいた。この人だけなのだ。正子の事件が起こる前とはいえわたしの内面に踏み込むことができた男は。

シヤカシヤカとバーテンがシェーカーを振る音がした。あの頃と変わらないと貞子は思った。例えばそれが昨日のカクテルを振っているような音でも。

自分は立ち直らなければならぬだろう。そう頭では分かっているても、体と心を納得させるのに、つぐみは更に二日を要した。

その二日間の大半をつぐみは眠って過ごした。必然的にレム睡眠の占める割合が増え、悪夢を立て続けに見た。顔の無いのっぺらぼうの男が母親に襲い掛かる様を見ながら、体が金縛りに遭ったように動かず、もがき苦しんでみたり、自分がいつの間にか妊娠している、膨張していく腹を抱えながら途方に暮れたり、または強姦とは無関係に思える災害や戦争の夢を見た。

強姦の事実を知った時は、朝まで眠れなかったことを考えれば、例えば悪夢を見ていたとしても、眠れている事実は体と心にとって良いことなのだろうか。そんなことを考え答えが出ないまま、つぐみは二日目の夜に級友たちにメールを返信した。

「レス遅れてごめんね。風邪でダウンしてたの。明日は学校行くね」

ギャル文字も顔文字も絵文字も使わなかった。皆は多分、それだけ自分が参っているのだと察してくれるだろうと期待した。そして例え察してくれなくても、そんなことはどうでも良いことのように思えた。そんなことよりも、浮かれた文字は使えないまでも、メールを打てるようになっただけ自分が回復したことが重要だった。

翌朝、三日ぶりに吸い込んだ外気も辺りを照らす太陽もつぐみは恐れなかった。けれど通学路を歩く制服姿の生徒たちの群れがつぐみを圧倒した。生徒たちの群れ。群れ。群れ。この中に強姦によって生まれた者は多分誰もいないのだろうとつぐみは思う。自分だけ自分だけなのだ。

これまでも自分のことを、異質な存在だとは思っていた。大抵の家には両親が揃っているのにつぐみにはいないからだ。離婚の多いご時勢だから、片親に育てられている子も珍しくはない。けれどつぐみのように、伯母に育てられている生徒はつぐみの知る限りいない。

しかしそんなことは、今となってはたいした問題ではなかった。自分が強姦によって生まれてしまったことを知った以上、今の環境になどたいした意味は無い。自分は呪われた出生により存在するのだと思う。何やら自分一人が周囲から浮いている気がする。

「おはよう」と戸井苗美といなえみが声をかけてきた。つぐみのクラスメイトであり、同じ吹奏楽部員でもある苗美は、つぐみと仲が良い。

「おはよう」と挨拶を返しながら、つぐみは思わず苗美の顔を見詰めた。屈託の無い顔だ。両親の揃っている苗美。父親はサラリーマン。母親は司法書士。感じの良い両親。優等生の苗美。両親のいないつぐみとも偏見を持たずに付き合ってくれる女友達。

苗美が自分の出生の秘密を知ったなら、どうするのだろうかとつぐみは思った。つい三日前までつぐみは苗美に何一つ隠し事をせずに付き合ってきた。けれどこれからは違う。これからつぐみは、一番の友人にすら出生の秘密を打ち明けずに付き合っていくのだ。あたしの秘密を知ったなら、あなたはひょっとして、あたしから離れて

いくのでしようとおびえながら。

どうしてこんなことになってしまったんだろうと、つぐみは思う。自分は今まで充分異質だったではないか。それなのになぜこれ以上異質でなければならぬのか。なぜ自分ばかりがこんな目に遭うのか。

苗美になり代わりたいと願いつつ、けれどつぐみの視線は苗美の顔元で止まっていた。愛嬌はあるが美しくはない友人。目と目が離れたカエルのようなかんばせ。まるで骨が入っていないかのような低い鼻。放っておけばつながってしまう眉毛。

苗美になり代わったなら、自分の容姿も苗美と交換することになる。そのことにつぐみは抵抗があった。貞子はずぐみを可愛い系だと言う。クラスメイトも時折つぐみの外見を褒める。

外見が比較的良いということが、どれだけの恩恵にあずかれるものなのか、まだ中学生のつぐみには分からない。だが持つて生まれた本能で、つぐみは苗美の顔と自分の顔を取り替えることを拒んだ。結局自分は、自分の出生をこれだけ呪っていながら、顔の皮一枚の話で、幸せな家庭生活を送る友人に、なり代わりたいという願いすら持てないのだという事実、つぐみは戦慄した。自分を出生させた父親をこんなにも恨みながら、つぐみは父親に与えられたかんばせを捨てられずにいる。

自分のことが何だか分からなくなり虚ろな足取りで歩くつぐみに、
苗美が

「どうしたの。まだ具合悪いの」

と心配そうに尋ねた。

「うん。ちょっとね。もうほとんど治ったんだけど」

「ツグミンが休んでる間に、部活に一人、新入生が入ったよ」

「え、こんな時期に？」

うちの中学の部活は全員参加が基本なのに、六月になった今になって、ようやく入って来る子がいるとは意外だとつぐみは思った。しかしそんなことなど、どうでも良いことに思えた。どうせその新

入生だつて和姦によつて生まれたのだ。そうやつて運命は強姦によつて生まれたあたしに、和姦によつて生まれた人間との逢瀬を次々に与える。

つぐみが顔には出さずにふて腐れていることには気付かず、苗美は「その子、転入生なんだつて」と告げた。

なるほど転入生ならば、今から部活に入つてもおかしくない。つぐみが一人納得していると苗美は

「しかも、コンバス希望」と続けた。

コントラバス、通称コンバスはつぐみの担当だったから、どうでも良いとは言つていられなくなった。コンバスは元々人員が少ないパートのため、現在はずぐみ一人が担当している。そこにコンバス希望の新生が現れたということは後釜ができたということだ。

「その子、コンバス経験あるの？」

「前の学校ではパーカッションだったんだつて。でも今うち、パーカッション足りてるでしょ？ それに本人が前々からコンバスに憧れてたらしくて」

「何ていう名前の子？」

つぐみの問いに、苗美は一瞬顔をしかめると

「えーとねえ、何か変わった名前の子だったよ。西海……、そうだ縫^{ぬい}だ。西海縫。糸を縫うつて書いて縫」

と答えた。最近は変わった名前の子が増えたものだ。

「ふうん。手芸部にも行った方が良さそうな名前だけどねえ」

「何ツグミン、後輩入るの嫌なの」

「そういう訳じゃないけど、コンバスに憧れるなんて珍しい子だなと思つて」

吹奏楽部では事前にやりたいパートの希望を募るが、コンバスに憧れる者は珍しい。女子生徒が全体の九割を占めるこの部では、数少ない男子生徒は、肺活量の求められるチューバやトランペットに

取られてしまふし、残りの女子生徒は、ピッコロだのフルートだのといった女の子らしい楽器に憧れる者が大半だからだ。けれどつぐみが余ったコンバスに無理矢理入れられたのかといえば、それは違う。

部活に入った当初、つぐみも例外無く希望の楽器を聞かれた。つぐみは自分に何の楽器が合っているか分からなかったため、運命に任せようと思って、希望を出さなかった。そこで背の高さを買われてコンバスを宛がわれた。当時コンバス担当者は三年生一人だったため、何としても後継者をつくりたかったという部活側の思惑もあった。

それだけ人気の無いコンバスをやりたがるとは、随分奇特な子が入ったものだ、と、つぐみは感心した。
すると苗美は

「確かに珍しいよねえ。つーかその子マジで珍しいよ。会ったら多分ツグミンびっくりすると思う」「
とニヤニヤした。

「びっくりするって、どういうこと?」

「それは、会ってからのお楽しみ」

期待に満ちたような顔で笑う苗美を眺めながら、今のあたしにとつて、これ以上びっくりすることなんてあるんだろうかと訝りつつ、つぐみは正面玄関を抜け、下駄箱に向かった。

下駄箱では、クラスメイトの根野望ねのぞむがユニフォーム姿で靴を履き替えていた。今から野球部の朝練なのだろう。根野はつぐみの姿を見つけると

「おー近山じゃん。お前は三日もズル休みしやがって」
といたずらっぽく笑みを浮かべた。

彫刻刀で彫られたかのような、鋭利な表情の根野がそんな冗談を言うと、つぐみの心はひどく安心した。何か気の利いたことを言わなければならぬと思う。でも頭が真っ白になってしまつて、ふさわしい言葉が見つからない。

つぐみはやっと

「ズル休みじゃないもん。風邪だもん」

とありきたりな返答をすると、急いで靴を履き替え、苗美と共に音楽室へと足早に歩いて行った。

「ツグミン、ラッキーじゃん。朝っぱらから根野君とお喋りできて」「三日の禁断生活の直後にいきなりあれじゃ、心臓が持たないよう」まだバクバクと波打つ心臓をさすりながら、全くこの三日間というもの、よくも根野に会わずに暮らせたものだどつぐみは自分に感心した。片想いの身では、何気ない言葉のやり取り一つが、貴重な宝石のようなものなのだ。

けれどその根野にしたって、もしあたしの出生を知れば、もうあんな風に気軽に声はかけてくれないのかも知れないと、つぐみは寂しい思いをした。誰にも知られたくないのはもちろんだけれど、特に根野には決して知られたくない。付き合いたいななんて大それた期待を持ったりはしないから、どうか根野にだけは絶対に知られたくないと願いながら、つぐみは苗美と共に音楽室へと向かった。

音楽室周辺には、すでに半数程の部員がやって来ていた。つぐみが「久し振りだねえ」とか「具合もうちの」などの通りいっぺん声をかけられていると、背後で

「ああ西海さん。こっちこっち」

という声がした。コンバス希望の転入生か。つぐみが振り向くと楽器倉庫から背の高い女子生徒が出て来るのが見えた。髪をつぐみと同じボブに切りそろえ、つぐみ同様ぱつん前髪にしている。

「会ったらびつくりすると思う」

と苗美が言ったのは、髪形のことだろうかどつぐみは考えた。こんな平凡な髪型がかぶったからといって何も驚くことはない。つぐみが黙って縫を見詰めていると、突然周囲に人だかりができ、皆が口々に

「似てるよねー」

「ホント、こうして改めて並べて見ると姉妹みたい」

「一卵性とまでは言わないけど、二卵性の双子くらいには似てるよ」と騒ぎ出した。

つぐみは驚き縫の顔をまじまじと観察した。卵形の輪郭。白目が青みがかった張りのある目元。短いまつげ。薄い眉。この子はあたしに似ているんだろうか。皆が言うのだから似ているんだろうか。

つぐみがぼんやりしていると、顧問教師が

「近山さん。この子はコンバス希望の西海縫さん。一年A組の転入生なの。指導よろしくね」

と歌うような声で紹介した。すかさず縫が

「西海縫です。よろしくお願いします」

と頭を下げた。

縫が口を開いた時、歯並びの悪さが見て取れた。あたしの歯並びはこんなに悪くない。つぐみは反発しつつも、縫の顔立ちが愛らしいことに気を良くして

「近山つぐみです。よろしく」と微笑んだ。

その周囲ではまだ外野が、「似ている」「似ている」と騒ぎ立っていた。縫はそれを聞きながら、曖昧な笑みを浮かべていた。おそらく縫も自分たちが似ているとは自覚していないのだろうとつぐみは思った。顔立ちが似ているということは、本人同士はあまり気付かないものなのかも知れない。

つぐみは何やらむず痒い思いで、縫を伴って楽器倉庫に入ると

「ホントはチューニング教えないけど、もうすぐ朝の合同チューニングが始まっちゃうから、今はあたしのすること見ててね」

と言ってチューナーとコンバスを取り出した。縫は「はい」と素直に答えた。三日も放置していた弦はだいぶ緩んでいる。チューニングに時間がかかりそうだ。新人とはいえ人が見ていると緊張する。

つぐみは順番にソ、レ、ラ、ミの音を出しながら、縫ももしあたしの出生を知ったら、こんな風に素直に、あたしの言うことを聞かないのかも知れないとぼんやり考えた。そして今朝登校してからと

いうもの、人と会う度に、そのようなことばかり考えている自分を悲しく思った。

このままではつぐみは、卑屈な人間になってしまふ。卑屈な人間は人に嫌われるからそれは避けなければならぬのだが、まだ十三歳のつぐみにはそれが分からないのだった。

合同チューニングのために音楽室に向かうと、まだ部員は三分の一程度しか集まっていなかった。こんなことなら、チューニングのやり方を教えてあげれば良かったかなとつぐみが後悔していると、縫が

「コントラバスって、ホントに綺麗ですよね」

と感極まった様子でつぶやいた。

「そう？」

「縫はバイオリンとかチェロとかコントラバスとかの、形がすごく好きなんです」

「形が気に入って、コンバス希望なの？」

吹奏楽部には普通、弦楽器はコンバスしか無い。たまにハープを使う学校もあるがそれは珍しい例だ。従って弦楽器の形に惹かれていたのなら、コンバスを希望するしか無い。それで縫はコンバスを希望したのだろうか、つぐみは考えた。

すると縫は

「それに縫、歯並び悪いし」

と恥ずかしそうに口元を押さえた。つぐみは「ああ」と納得した。歯並びが悪ければ、金管楽器にも木管楽器にも向いているとは言いがたい。

「だから前の学校では、パーカッションだったんです。前の学校はコントラバス無くって。でも転校してコントラバスのある学校に来て良かったです」

「前は、どこの学校にいたの？」

「北海道です。パパの転勤でこっちに来て。パパは昔こっちに住んでて実家も近所にあるんです」

北海道という地名にふとつぐみは憧れを覚えた。日本の最北の地、北海道。そこまで逃げて行きたいと思った。そこまで逃げれば、自分の出生の秘密も自分を追って来られないような錯覚に一瞬陥った。けれどすぐにつぐみは覚醒した。自分は自分から逃れられない。自分は自分の出生の秘密を、一生背負って生きるのだと。

顧問教諭の女性教師が音楽室に入って来た。柔らかい素材のロングスカートに巻き髪を欠かさない彼女は、見た目はおっとりとしたお嬢さん風だがその指導は厳しい。

指揮棒が上がった。つぐみは弓をきりりと握り締めた。

縫とつぐみは一週間もしない内に親しくなり、十日もしない内にお互いの家を行き来するようになった。縫が半年前に、母親を病気で亡くしたばかりだというのが決め手になった。伯母と二人で暮らすつぐみにとっては両親の欠けた相手に親しみを感じるのだ。そしてそれは縫にとっても同様だった。父親と二人暮らしの縫にとっては、伯母と二人暮らしのつぐみが、親近感の対象になった。

縫を自宅に連れて行くと、貞子は縫を喜んで歓迎した。

「この子って一人っ子で、年下の子と仲良くなった経験が無いのよ。せいぜい甘えてお姉さん気分を味わわせてあげてね」
などと縫に吹き込んでいた。

麦茶とデラウエアを出し貞子が立ち去ると、縫は

「先輩の伯母さんって、美人ですねえ」

と目を輝かした。身内を褒められるのは悪い気はしないが何やらくすぐつたい。つぐみはわざと

「でももう、三十五だよ」

と伯母の年齢をばらした。

「見えないー。せいぜい三十そこそこって感じですよ。でも先輩に似てないですね」

「悪かったわね。あたしは父親似なのよ」

こんなじゃれ合いもできるようになって、つぐみは幸福だった。出生の秘密は今でもつぐみの胸に重くのしかかっている。けれど現実はそのなかにおかまいなく、がんがらがんがら進んでいく。だつたらその中から、幸福だと思える出来事を味わって自分を誤魔化しながら生きての方が良いと、つぐみは思い始めていた。自分が強姦によって生まれたということは別に自分のせいではないのだ。

ならばその事実を意識の外に追いやり、こうして楽しんだ方が良いと、つぐみは思い始めていた。実際、後輩という関係の女子生徒とここまで仲良くなったのは、これが初めての経験だった。これまで対等の友達関係しか持ったことの無かったつぐみにとって、これは新鮮な出来事だった。

もし妹というものがいたら、こんな感覚だったんだろうかと、自分と似たかんばせを持つ縫をつぐみは眺めた。一年しか歳が違わないのに、どこか幼さの残る縫が可愛くてたまらなかった。

その日はつぐみが縫の家を訪問した。縫の家は新興の高級住宅地にある。パパが随分稼いでいるのだなと思いつながら、水色のノースリーブの上に董色のチュニツクを重ね、デニムパンツをはいたつぐみは、門を抜けて玄関へと歩いて行った。庭先の紫陽花の花が先程からポツポツと降り始めた雨の中で、青く浮かび上がっている。

もう入梅だな。傘を持って来て良かったと思いつながらつぐみはインターホンを押した。

「開いてます。どうぞ入って」

縫の応答によりドアを開けると、玄関から広がる廊下はチリ一つ無く、ひんやりと光っていた。母親の手が無いというのに随分綺麗にしているんだなと感心しながら、つぐみが靴を脱いでいると、サロペット姿で二階から降りて来た縫が

「先輩、縫の部屋こつち」

と二階を指した。

縫の部屋はつぐみの部屋の倍程の広さでつぐみは思わず目を見張

った。その部屋に、いわゆる普通の学習机とは違う、カントリー調の蓋で開くタイプの机や、天蓋付きのベッドや縫専門のパソコンなどが、豊かさを誇るかのように設置されている。母親がいけないとはいえ、縫は父親に可愛がられているのだなと思った。縫の幸せを喜ぶ気持ちと相反する微かな嫉妬が、つぐみの中に湧き上がった

そんなつぐみの気持ちには気付かず、縫は

「先輩、これ見たことありますか」

と突然ポーチから何かを取り出した。セロファンに包まれた平べったいそれは、つぐみが初めて目にする物だった。

「知らない。何これ」

「コンドーム」

「えっ、何でそんなの持ってるの」

縫の手につままれるそれをまじまじと見詰めながらつぐみが叫ぶと、縫はなぜか、勝ち誇ったような顔をしながら

「パパにもらったんです」

と答えた。

「パパが？ 何で？」

「『レイプされそうになったら、相手に渡しなさい』って」

「……レイプ？」

つぐみは一瞬、縫が自分の出生の秘密を知っているのではないかと青ざめた。しかしそんな事があるはずは無い。貞子が縫にそのようなことを言うはずが無いのだ。

つぐみがこっそり息を整えていると、縫は

「何かパパが言うには、アメリカの女の人って大概持ち歩いてるらしいんですよ。それでレイプされそうになったら、『付けて』って相手に渡すんですって。『だからお前もこれを肌身離さず持ち歩いて、襲われそうになったら、相手に渡しなさい』ってくれたんです」と苦笑した。

「でもここ日本じゃん。レイプなんてそんなしょっちゅうある訳…」

…」

「ですよー。まあでもしよっちゅう無くても、万に一つレイプされて、それで妊娠したら困りますからね」

「まあ、それはそうだけど」

あたしの母親も、コンドームを持ち歩いていれば良かったのだなあと考えながら、つぐみは答えた。日々コンドームを携帯しそして父親に強姦された時にそれを渡していれば、自分は誕生しないで済んだのだ。しかし相手に「付けて」と渡した時点で、それは強姦を了承したことになるのだろうか。

つぐみが割り切れない思いを抱いていると、縫がそれを見透かしたかのように

「でもアメリカの女の人って、ある意味割り切ってますよね。レイプするんならじゃあせめて避妊してって、コンドーム渡す訳ですから。もちろん男の人には力じゃかなわないから逃げるのは難しいと思うけど、でもそれにしたって、アメリカの合理主義ってそこまでいってんのかって感じですよね」

と何やら難しいことを言い出した。

「っーか、縫ちゃんのパパって変わってるね」

「心配性なんですよ。ていうかレイプを心配してるのは、建前かなって気がするんですけど」

「つまり本当は、縫ちゃんが彼氏とエッチして妊娠するのを心配してるってこと？」

そう尋ねた瞬間つぐみは顔が熱くなるのを感じた。彼氏とエッチ。彼氏。つぐみは思わず根野望を連想した。付き合いたいなどと大それた希望は持っていないが、しかしもし根野と付き合ったら、いざれエッチをすることになるのだろうかと考えると、走り出してしまいたいそうなくらい恥ずかしく恐ろしい。つぐみはまだキスもしたことが無いのだから。

つぐみが胸を高鳴らせていると、縫は

「彼氏ができることもそうですけど何ていうのかな。全般的に心配してる訳です。ほらうち、ママが病気で死んじゃったり引越した

り色々あったから、縫が悪い子になっちゃうのを心配してるって
うか。だから縫が悪い子になった場合の最悪の結果が、パパにとっ
ては妊娠なのかなみたいな」

と淡々と語った。

縫は母親を失った後、自分と二人きりで暮らす異性を、客観的に
見ることを始めていたのだった。

「ああ何となく分かる。つーか縫ちゃん悪い子になっちゃ駄目だよ」
「なりませんよ。そりゃあママが死んだのは辛いけど、でもそれで
縫が悪い子になっちゃったら、パパ再婚しちゃうかも知れないから」
「パパが再婚するの、嫌なの？」

あたしは伯母さんに結婚して欲しいけどなあと思いつつ、つぐ
みは尋ねた。貞子は結婚しない理由をつぐみのせいではないと言っ
たが、しかしつぐみは、自分の存在に負い目を感じているからだ。

けれど一方の縫は、そのような発想を持たなかったため

「再婚なんて嫌ですよ。だから縫、元気だった頃ママがやってたみ
たいに家事もきちんとしてるんです。家の中が荒れちゃったらパ
パも奥さん欲しくなるでしょ。だからパパが再婚しないために、縫、
頑張ってるんです」

と胸をそらせた。つぐみは複雑な思いで縫を見詰めた。

つぐみには父親の再婚を嫌がる縫の気持ちは、あまり分からな
かった。それは親の自由であり、再婚したい人がいれば良いの
だと思えた。しかも再婚を阻止するために家事を頑張るといふ発想
は、つぐみにとってはしんどいものだった。つぐみだったら新しい
母親に家事を任せられるなら、それに越したことは無かった。

事実つぐみが貞子の結婚を望むのは、家事の問題もあった。もし
貞子がそれなりの稼ぎの男と結婚すれば、貞子は仕事を辞めるなり
減らすなりするはずだった。そうすればつぐみの家事の負担も減り、
つぐみは楽になるのだ。

しかし一方で、このような考え方をする自分に罪悪感も持ってい
た。貞子の幸せを望む振りをして、本当は自分が楽になることを、

望んでいるだけなのではないかという気もした。そう考えると、家事を頑張っている主張する縫が何やら立派にも思えてくるのだった。現に先程の廊下もこの部屋もきちんと掃除されているではないか。

その時玄関の方から、ガチャガチャと鍵を開ける音がした。

「あ、パパ帰って来たみたい」

と縫は立ち上がると部屋を出て行った。パタパタと階段を下りる縫の足音が響いた後、一階の方から、父娘が言葉を交わしているらしい声が聞こえてきたが、やがて複数の足音と共にその声は階段を上がり、扉がガチャリと開けられた。

「パパ、こちらがつぐみ先輩。コンバスを教わってるの」

「初めまして。どうもお邪魔してます」

突然現れた縫の父親につぐみは慌てて頭を下げた。スーツ姿の父親は

「縫の父です。ごゆっくり」

と微笑むと、すぐさま扉を閉じて部屋を出て行った。

つぐみは深呼吸をすると縫に言った。

「縫ちゃんって、パパにそっくりだね」

「あーよく言われるんです。縫ママに全然似てないの」

「そうなんだ」

つぐみは目を閉じると、縫の父親の姿をまぶたの裏に焼き付けた。縫同様ひよろりと高い背。薄い肩。さすがに歳のせいかわ白目は青みがかったはいなかったが張りのある目元。短いまつげ。

つぐみは目を開くと

「そういえば縫ちゃんのパパって、北海道行く前こっちに住んでたんだよね」

と尋ねた。

「そうです。ママと出会う前。十四年くらい前かなあ」

「実家があるんだから、子供の頃からずっと住んでたんだよね」

「そうですね」

一体何の話が始まるのだろうか。縫がいぶかっていると、突然つぐみは、北海道時代のアルバムが見たいと言い出した。縫は一年前のアルバムを取り出した。小学校の修学旅行や遠足の写真に混じって、親子三人の家族旅行のスナップがアルバムに貼られていた。

「これママと最後に出かけた時の写真なんですけどお、霧の摩周湖のはずなのに、全然霧が無かったですよ。摩周湖に行った時、霧が出てないと晩婚になっちゃうらしくて、縫、結構へこんだんですよ」

縫が示した写真には、霧が無かったおかげで親子三人の顔がくつきりと写っていた。縫の母親はお雛様のようなちんまりした顔立ちで、背も低く縫にはあまり似ていなかった。そしてその隣に佇む父親は、明らかにそのかんばせを娘に伝えていた。

つぐみはそれを確認すると

「ごめん。用を思い出した。もう帰らなきゃ」

とトートバッグ手に取った。縫は一瞬、失望を露にした。母親の話をしたかったのだろう。けれど今のつぐみにはそれを聞いている余裕は無かった。

「今、雨がすごく強くなってますよお。気を付けて下さいね」

縫に玄関まで送られた時

「おや、もうお帰りですか」

と縫の父親がまた顔を出した。先程二階に現れた時とは打って変わって、ラフなTシャツ姿になっている。だがつぐみは縫の父親の服装など見ていなかった。つぐみはただ彼のかんばせに目を奪われていた。似ている、似ている、鼻の尖り具合も輪郭の線もこの父娘は似ている。

つぐみは縫の父親の顔をじっと見詰めながら

「またお邪魔しても、よろしいでしょうか」

と尋ねた。縫の父親は

「遠慮せずに、いつでも来て下さい」

と微笑んだ。その口の中で乱れた歯並びが光っていた。

玄関を出た後、つぐみは傘越しに西海邸を振り返った。庭先の青い紫陽花が雨の中で溺れているのが見えた。

ひよつとして縫の父親は自分の父親ではないのか。その思いはつぐみの中で、日増しに大きな疑惑へと変わっていった。人は皆あたと縫を姉妹のように似ていると感嘆する。そしてその縫は、父親によく似ている。

それにあのコンドームの件も、今にして考えればおかしな話だ。中一の娘に父親が強姦を恐れて避妊具を渡すとは。それはあの父親に強姦の経験があったからではないのか。あるいは父親はあたしの母親の妊娠を知っていたのかも知れない。その可能性は高いのではないか。縫の父親はあたしの母親を強姦した後、母親の妊娠を知り、逃げるために北海道へ行ったのではないのか。

憎しみがふつふつと、つぐみの中に湧き上がった。妊娠した母親を捨て北海道で結婚をし、ぬくぬくと幸せな家庭を築いていた父親が許せない。けれどこれはあくまでも想像に過ぎないのだ。

つぐみは本当は確かめたかった。

「あなたは十四年前に母を犯し、その後、北海道に逃げたのではないですか」

と縫の父親に聞いた。だしたかった。

しかしそれはできない相談だった。もし間違っていた場合、つぐみはみすみす自分の出生の秘密を縫の父親に明かすことになる。人の口に戸は立てられないから、その話はすぐに縫の耳に入るだろう。そんなことになればこれまでの縫との友好関係は台無しだ。いやそもそも、縫の父親が母親を犯した相手だったとしても、それを認めるとは限らない。

にっちもさっちもいかない思いのまま、つぐみは次第に縫の父親を憎悪し始めた。縫の父親が、本当に自分の父親であろうと無かる

うと、そんなことは最早たいした問題ではなくなった。つぐみは自分の父親を恨んでいた。そのはけ口としてのリアルな存在として縫の父親は利用され始めた。

とはいえつぐみは理性的な性質だったから、直接、縫の父親に嫌がらせをすることは無かった。つぐみの復讐はいつも頭の中で行なわれた。

空想の中でつぐみは空間移動をこなす透明人間だった。つぐみは度々、西海邸を訪れる自分を想像した。ある時は玄関から入って来たばかりの縫の父親を突き飛ばし、倒れた父親に足で何度も蹴りを入れた。またある時は居間でくつろぐ縫の父親に、ゴミ箱で殴りつけ倒れるまで殴り倒した。

次はどんなやり方で傷つけてやろうか。次第につぐみはワクワクし始めた。透明人間に突然襲われる恐怖は並大抵のものではないだろう。一体何の力が、何のために作用するのかと、人は恐怖に震えるに違いない。けれど訳が分からないのはつぐみも同じだった。つぐみは父親を知らないのだ。自分の母親を強姦しその後消えてしまった父親のことを。

もしかしたら縫の父親は無関係なのかも知れない。そう思いながらもつぐみは、空想の世界で縫の父親をいたぶることをやめられなかった。だってあたしは何もしていないとつぐみは思った。心の中で何を想像しようとするのは自分の自由だとつぐみには思われた。

心の自由を謳歌するべく、つぐみは縫の父親を連日痛めつけた。そしてボロボロになった父親の前で、初めて姿を現しこう言った。

「あたしが誰か、分かる？」

愛情の反対語は憎しみではなく無関心だと、マザーテレサは言った。つぐみは少なくとも自分の父親に対し、無関心ではいられなかった。

そんな日々を送っている最中、つぐみは貞子に

「ツツタン最近、怖い顔してるね」

と指摘された。日曜日、共に買物に出かけたドラッグストアで、

貞子はふと買物の手を止めそう言い出した。

「そう?」とつぐみは気付かない振りをして、買物メモを眺めていた。今日は全品5%オフの日だから、買い忘れが無いようにしなければならぬ。5%オフの表示につられて店内は賑わっていた。この不況の折、庶民はいかに安く買えるかという情報に目ざとい。

「何か最近ツツタン変だよ。時々怖い顔してポーツとしてる。何か嫌なことでもあったの?」

「別に」

「伯母さんが相談にのれることならるよ。何か悩んでるなら話してみて」

伯母さんに言える訳無いじゃないのと、つぐみは鼻白んだ。それだけでなく貞子は近頃帰りが遅い。男でもできたのか何やら生き生きと若返ってきた。自分はモテないと言ったくせに、その舌の根も乾かぬ内に貞子は恋愛にうつつを抜かしているのだ。

しかしそれ自体は別に悪いことではない。ただ色ボケしている貞子に、こんなことを打ち明けてどうするのだとつぐみは思った。貞子はずぐみが強姦によって生まれたのだと、口をすべらせたことを覚えていない。そんな貞子に今更何を言えば良いというのか。

だがせっかく貞子が、相談にのると言っているのなら、これは一つのチャンスだとつぐみは思った。そこでつぐみは

「あたし中学出たら、どうしたらいいのかなあと思っ」

と前々からの心の懸念を打ち明けた。

「どうするって、進学するんでしょ?」

「高校、行かせてくれるの?」

「当たり前じゃない。大学まで出してあげるわよ。ツツタン割と頭いいしおじいちゃんたちの遺産もあるし」

何だそんなことだったのかと、貞子が安心している様を見やりながら、大人をだますのって案外簡単だなとつぐみは思った。彼らは中学生の悩みといえ、せいぜい学校問題と恋愛問題ぐらいのものだと思っっている。いや大抵の中学生ならそうなのかも知れない。自

分の母親を強姦した男が、後輩の父親かも知れないなどという疑念を抱いているケースなど、早々あるはずが無い。

だがふとつぐみは、自分は幸せなのかも知れないと考えた。施設に入れられても仕方の無い身の上だというのに、こうして貞子に育てられ進学まで約束されている。この不況の折、例え両親がそろっていても進学もままならない者もいる中で、少なくとも自分は将来を保障されているのだ。

すると何やら、大学に行かせてもらうことが大変申し訳ないような気になって、つぐみは

「だっておじいちゃんたちの遺産は、伯母さんのものでしょ。それをあたしの進学になんか使っているの」

と殊勝なことを言い出した。

「だってお金は、使わなきゃ意味が無いじゃない。どうせ使うなら意味のある使い方しなきゃ。成績のいいツツタンに投資するのは賢い使い方だと思うよ」

「投資？」

「ツツタンは金の卵ってこと。ちゃんとした学歴持って就職してくれた方が、わたしも何かと都合がいいしね」

何だ、伯母さんも結構したたかなんだなあと思うとつぐみは気が楽になり、貞子と共に買物カゴに商品を入れ始めた。確かに姪に恩を売っておいた方が、貞子としては何かと都合がいいだろう。そして恩を売られた以上は、つぐみにしたって恩返しをすることはやぶさかではない。

けれど今の口約束は、貞子が結婚をしない前提のものなのではないかと、つぐみはにわか不安を覚えた。もし貞子が結婚したら、貞子の財産に夫が口を挟んでくる可能性が生まれる。そうするとつぐみの大学進学は絵に描いた餅になってしまうのだ。

ふとパパに再婚して欲しくないと言っていた縫の言葉が思い出され、つぐみは何やら、分かるような気がしてきた。保護者の結婚というものは、子供の人生に予想外の展開を生む懸念がある。それに

も関わらず、貞子に結婚して欲しいなどとのん気に願っていたあたしは、何て浅はかだったんだろう。

つぐみは貞子に、今の彼氏と結婚する気があるのかどうか聞こうと思い立ったが、その時、レジの順番が回ってきて会話は中断された。つぐみが発しようと思っていた言葉はそのまま空に浮き、「お待たせ致しました」という店員の声にかき消された。

縫が入部してから一ヶ月が経った。コンバスを構える姿も様になり、ドレミファソラシドの位置もどうにか覚えた。あとはシャープやフラットの位置を、把握してくれば安心だ。もっとも弦の弾き方や弓使いなど、まだまだ覚えてもらわなければならない事柄は沢山あるが。

今日の練習は体育館で行なわれた。地区コンクールに向け、そろそろステージ練習をする必要があるのだ。縫は二人分のコンバスをふうふう言いながら二往復して運ぶと

「コンバスって、案外しんどいですねえ」と溜め息を吐いた。

「先輩の楽器を運ぶのは、気の毒だけど後輩の役目だからねえ。ピッコロとかフルートなら軽いからいいけど、コンバスは重いからねえ」

とつぐみがねぎらうと、縫は「楽器を運ぶのは、毎日じゃないからいいんですけど、コンバスって立ちっぱなしじゃないですか。しかもパーカッションと違ってずっと楽器を支えてなきゃなんないし、コンバスに人気が無い理由が、やっとなかりましたよ」

と弱音を吐いた。

自分が通って来た苦しい道を辿っている者には、親しみが湧く。つぐみは縫を可愛く思いながら、ふとこの感情は、縫が腹違いの妹

だからこそ芽生えたものなのだろうかと考えた。

周囲にまるで姉妹のようだと言われている自分たちが、ひよつとしたら本物の姉妹かも知れないというのは、何やら皮肉な気持ちだった。しかも姉である自分は父親に捨てられ、妹である縫は、父親の庇護の元、幸福に暮らしているのだ。

だが不思議とつぐみは、縫に憎しみを覚えなかった。父親のしたことは縫には無関係なことだし、もし縫の父親が本当に強姦魔なら縫は強姦魔の娘ということになる。例え縫の母親とは和姦だったにしろ、父親が過去に強姦をしていたなどと知ったら、縫は辛いだろう。

そんなことを考えながらつぐみが楽譜に目を通してしていると、縫が不意に

「ねえ先輩」

と深刻そうな目をした。

「何？」

「縫、最近パパが心配なんですよ」

「どうかしたの」

縫が不安がっていた再婚話でも浮上したのだろうかと考えながらつぐみが尋ねると、縫は

「最近パパついてなくて、階段からは転がり落ちるし、買ったばかりの車は十円ビームで傷だらけにされるし、この間なんて街でチンピラに絡まれて怪我しちゃって、病院通いしてるんですよ」と薄い眉をひそめた。

「それはまた、災難続きだね」

「何でこういふことばっか、続くんですかねえ」

困り果てる縫の姿を眺めながら、つぐみは背筋が寒くなるのを感じた。階段からの転落やら十円ビームやらといった空想は、つぐみはしていない。していないが、自分が毎夜呪いをかけている相手が、現実に不幸に陥っている事実には、つぐみは落ち着かない思いを抱いた。

その時、話を聞いていたらしい苗美が

「もしかして誰かに、恨まれてるとか」

と横から入ってきた。つぐみはぎくりとしながら苗美を見たが、苗美はつぐみの心中になど気付いていない様子だった。

「やつぱり、そうなんですかねえ」

「かもよ。ママの知り合いに霊視ができる人がいるんだけど、人の恨みのパワーってすごいんだって。相手をもものすごく恨むと、恨まれた相手に災いが起きるんだって。だからもしかして誰かが縫ちゃんのパパのこと、恨んでるのかも知れない」

突然話がオカルトめいてきてつぐみは驚いた。馬鹿馬鹿しい。そんなことがある訳が無い。そう思いながらつぐみは

「え、恨んでる相手が、実際に十円ビームしたり絡んだりしたんじゃないの？」

と言ったが、縫は

「でも苗美先輩の言う通りかも知れないです。だって誰に突き落とされた訳じゃないのに、階段からも落ちたんですよ。絡んできた相手もパパ『見覚え無い』って言ってるし、もしかしたら誰かが、パパを恨んでるのかも知れません」

と青い顔をした。

これが先日、アメリカの合理主義がどうか言っていた子のセリフだろうか、つぐみは呆れた。しかし恨みのパワーうんぬんの話を持ち出したのは、優等生の苗美であることを考えると、何やら信憑性があるようにも思えてきた。そうなんだろうかとつぐみは思った。あたしの恨みのパワーが縫の父親に災いをもたらしているのだろうか。

だが次の瞬間、つぐみはまさかと思った。それは霊視などの特別な力を持っている人の話だろう。超常現象を頭から否定するつもりは無いけれど、あたしにそんな力があるはずが無い。

そう思いながら、つぐみは

「考え過ぎだよ。たまたまついてないだけだって。誰でもそういう

時期あるじゃん？」

と縫を励ました。縫の父親の不幸を願い、日々彼を罰しているつぐみがこんなことを言うのは妙なことだったが、しかしつぐみは縫の悲しい顔は見たくなかった。

夜になりベッドに入った時、つぐみは昼間の会話を思い出した。頭の中で

「恨みのパワーってすごいんだって。相手をものすごく恨むと、恨まれた相手に災いが起きるんだって」

という苗美の声が不吉に響いた。

つぐみはぶるぶると頭を振った。そんなことがある訳が無い。ただかだか人を心の中で恨んだくらいで、そんなことが起こる訳が無い。そんなことが起き得るとしたらあたしはもう自由に縫の父親を恨めないではないか。あたしの心は自由だ。あたしは今夜も父親を恨む。つぐみはいつもよりも強い意志で、縫の父親を思った。おそらくもう寢床に入っている頃合だろう。見たことも無い縫の父親の寝室とその寝姿がつぐみの脳裏に広がった。つぐみはその傍らに立つとその両の目に針を付き立て、髪を燃やし布団を燃やしパジャマを燃やした。二つの眼から鮮血をほとばしらせながら、縫の父親が火だるまになって飛び上がる様が見えた。苦しめ。苦しむのよ。ママとあたしの分まであなたは苦しむのよ。

空想の中、縫が父親に向かってバケツの水を浴びせるのが見えた。その真剣な眼差しにつぐみの心は痛んだ。

面会時間を迎えた日曜日の総合病院はざわめいていた。病院という場所を訪れると、つぐみは毎度のことながら、世の中にこれだけ多くの人々が病を持ち、怪我をしているのだという事実に驚かされる。つぐみは何やら健康な自分を恥ずかしく思いながら、目当ての病室へと進んで行った。片手には先程、花屋でアレンジしてもらっ

た見舞い用の花束を携えている。

縫の父親がICUに運び込まれたのは三日前のことだった。車を運転していた際、自損事故を起こし内臓を破裂させたのだ。幸い術後の経過も良く、命には別状が無いとのことで一般病室に移されたが、数ヶ月の入院が必要とのことだった。

受付で教わった病室はドアが開いていた。こじんまりとした一人部屋だ。開け放たれたカーテンの間から、外に出られない患者をあざけるかのように、夏の太陽がきらめきながら降り注いでいた。

つぐみが顔を覗かせると、横たわった父親の隣で座っていた縫と目が合った。半そでのGジャンの下に、スパンコールの付いたキヤミソールを着込み、ショートパンツを履いた縫のいでたちは、患者の付き添いとしてはいささか不釣合いな装いに見えた。

「あ、先輩」

「こんにちは」

つぐみは挨拶をしながら病室に入ると

「あの、つまらない物ですがお見舞いの花束です」

と父親に見せ、そのまま縫に渡した。

「どうも、わざわざすみません」

と父親はかすれた声を出した。疲労のせいか声質まで変わっているような気がした。初めて会った時、縫の父親の声は染み入るようなバスではなかっただろうか。

「先輩、あたしこのお花、花瓶に入れて来ます。一緒に行きます？」

と縫が立ち上がった。つぐみはうなずきながら縫の父親を見た。

点滴を打たれている筋張った腕。病院の寝巻きにくるまれた痩せた肩。その上にある青白い顔。

あたしのせいだろうかとつぐみは思った。あたしがこの人を恨んだから、この人は事故に遭ってしまったのだろうか。

つぐみは縫と共に薬品の匂いが立ち込める病院の廊下を歩いた。歩きながら縫は

「先輩、来てくれてありがとうございます」

と礼を言った。

「ううん、別に」

「縫、ホントに怖かったの。病院から電話が来た時は」

「うん」

「縫一人でどうしていいか分かんなくて、おばあちゃんに来てもらって、入院の手続きとかして、ああこんな時ママがいればなあと思って。ママがいなくてもママの代わりに家のことちゃんとするって決めたのに、縫、全然役に立たなくて」

縫の声を聞きながら、つぐみは胸がざわめくのを感じた。この子のこの苦しみもあたしが与えたものなんだろうか。本当にあたしの恨みのパワーが、今回の事故を引き起こしたんだろうか。

鼻をすすりながら花瓶に水を入れる縫に、つぐみは

「しょうがないよ。あたしたちまだ中学生だもん。こういう時に大人みたいに上手くやれなくても仕方ないよ。縫ちゃんは自分のやれること充分やったよ」

とねぎらった。

「そうですねえ」

「それにもうこんなこと、これで最後だよ」

断言するつぐみの声が、かすかに震えた。縫は「え？」とつぐみに問いかけるような視線を投げた。

「縫ちゃんのパパに起こるトラブル。きっともうこれで終わるよ」
もう縫の父親を恨むのはやめようと決意しながら、つぐみは言った。縫の父親に起こったトラブルが、自分の恨みのパワーのせいかどうかは分からない。また縫の父親が自分の父親かどうかも分からない。だがあんな痛々しい姿を見てしまったら、もうつぐみは縫の父親を恨むことはできなかった。自分の父親を許した訳ではなかったけれど、ただこれ以上、縫の父親を憎むことはできなかった。

「ホントですかねえ。ホントに終わりますかねえ」

いつの間にか縫は、涙をぼろぼろと流していた。つぐみはデニムスカートのポケットから小花模様のハンカチを取り出すと、それを

縫に手渡し

「大丈夫、大丈夫」

と言いながら縫の頭をポンポンと撫でた。

何だか本当に縫が、実の妹のような気がしてきた。縫の父親が自分の父親だったら困るけれど、縫が妹だったならそれはそれで幸せなことのような気がした。

縫は子供のような不器用な所作で涙を拭くと

「ありがとうございます。これ洗って返しますね」

と、つぐみのハンカチをポケットにしまいながら笑った。まだ涙の残る瞳がキラリと光り、つぐみの心を刺した。

いずれにしろこれだけ仲良くしている後輩の父親のことを、自分は密かに呪っていたのだと、つぐみは思った。それは充分罪深いことだったのではないだろうか。

重い心を引きずりながら病室へ戻ると、どういふ訳かドアが閉まっていた。先程ドアは開け放ったまま出たはずなのに。けげんに思いドアを開けた瞬間、後ろで縫がはっと息を飲む音が聞こえた。縫はそのまま花瓶を両の手から落とし、病院内にガチャンという異音が響いた。

花瓶は割れ水はこぼれ花は散った。床を彩る瑞々しい花びらを眺め、死ぬ時まで花は綺麗だと感心しながら、つぐみはこの清掃はどうしたら良いのだろうと思った。縫の父親の元を訪れた面会者の存在が、縫の手をすべらせたことは分かっていたが、つぐみは今それを認めたくなかった。

出生の秘密（後書き）

私の中の異色作ですが、気に入っています。
ご意見感想お待ちしております。

女たちの恋（前書き）

父親の病室に入った途端、縫ぬいが驚きのあまり花瓶を落としたのは、なぜなっただのか。勘の良い方ならお分かりでしょう。

この時の縫の動揺がその後、波紋を広げる第2話です。

私たちの恋

病院前のバスの停留所で、つぐみは貞子と二人バスを待っていた。ベンチの上には日よけがついていたものの、初夏の勢いを持つ太陽は容赦なく地面に照りつけ、その反射が二人の体を火照らせていた。つぐみたちの他にも二人程、隣のベンチに腰かけている者がいたが、こちらは連れではなさそうだった。八十がらみの老婆が、暑さにうだるような様子でぼんやりと座っている横で、隣の中年男はスポーツ新聞に真剣に見入っていた。

しばらくして貞子が

「縫ちゃん、怒ってたねえ」

とつぶやいた。つぐみは

「うん。カンカンだった」

と答えた。

貞子はカゴ型のバッグから扇子を取り出すと

「どうしてあんなに、怒ったのかしらねえ」

とおっとり尋ねながら扇ぎ始めた。

よく見ると今日の貞子は、藤色のワンピースをまとい、胸には首筋の美しさを強調するような大ぶりのべっ甲のネックレスを垂らししている。見舞いに来たはずだというのに、そのいでたちには、怪我人を見舞うというよりは、男と逢引をする女の浮き立つ心が匂っていた。

ポロシャツにデニムスカートという軽装で、伯母の隣に腰掛けていることに、つぐみは何とも気詰まりな思いに駆られながら

「そりゃだって伯母さんが、縫ちゃんのパパとキスしてたから」

と小声で言って顔を赤らめた。

テレビや映画の画面を通さずに、人のキスシーンを見たのは、つぐみはこれが初めてだった。しかも相手が自分の身内とあっては気恥ずかしさが体中を駆け巡る。

「だって付き合ってるんだから、キスしたっていいじゃない」

「でも娘の身としては、突然自分のパパが、よその女とラブシーン繰り広げてたらショックだと思うよ。しかもその相手が面識ある伯母さんだった訳だから」

「そう？　素性の分からない女がパパの唇奪ってたんなら、びつくりするかも知れないけど、知ってる相手なんだからいいじゃない。ツツタン縫ちゃんも仲いいんでしょ？」

貞子の楽天家振りに、つぐみは心底驚いた。大人というものは中学生の繊細な心を全く理解していないのだろうか。いくら小中学生が売買春をする時代とはいえ、そんなことをしているのは、全体の数パーセントだ。貞子にだって中学生だった時代があったはずなのに、年齢を重ねる内に、思春期の潔癖さというものは忘れ去られてしまうものなのだろうか。

つぐみはすっかり貞子に呆れながら

「伯母さん知らなかったの？　自分の彼氏が縫ちゃんのパパだったこと」

と尋ねた。別に事前に知っていたからといって悪いということはないのだが、しかしもし知っていたのなら、つぐみに一言あっても良いはずだった。

「知らないわよ。ツツタン縫ちゃんの苗字、伯母さんに言わなかったじゃない。縫ちゃんが転入生だったことも」

「じゃあ縫ちゃんのパパも、知らなかったのかな」

「知らなかったんじゃないの。知ってたらさすがに言ってくるわよ」貞子は答えながらやれやれと思っていた。まさか北中に転入したという西海の娘が、姪の後輩の縫だったとは、思ってもみなかった。言われてみれば確かに縫は西海によく似ているが、そんなことは改めて考えてみなければ分からなかった。

つぐみは「そう」と答え、しばらく迷った後

「縫ちゃんは、元々パパの再婚に反対みたいだよ」

と言った。遅かれ早かれ分かることなら、早めに伝えておいた方

が貞子にとっては良いだろうとつぐみには思われた。

「反対なの？ 何で？」

「何でかは知らないけど、それが普通の子供の気持ちなんじゃないの」

「ツツタンは、伯母さんが結婚するの反対？」

つぐみは思わず黙り込んだ。今までなら貞子の結婚に反対する気は毛頭無かった。縫の父親は稼ぎも悪くなさそうだから、つぐみは約束通り進学をさせてもらえそうだし、縫父娘と同居することになれば、貞子が仕事を辞めようと続けようと、確実に家事の負担は減る。だが縫の父親はひよつとしたら母を犯した相手かも知れないのだ。そんな男と家族になつたりして、果たして良いのだろうか。

だがつぐみはこつも考えた。もし縫の父親と家族になれば、縫の父親が本当に母を犯した相手なのかどうか探り易くなる。けれどそんな動機で、人と家族になつたりして良いのだろうか。もし縫の父親が本当に強姦魔だったとしたら、貞子は妹を犯した相手と結婚することになるのだ。それは何と歪んだ家庭だろう。

つぐみは今こそ自分は、自分の出生の秘密を貞子に聞いたはずきだと思った。伯母さんあたし聞いてちゃったの。伯母さんが酔っ払って言ったこと聞いてちゃったの。あたしのママを犯したのは、ひよつとして縫ちゃんのパパじゃないの？

しかしその時、隣の中年男が立てたスポーツ新聞をめくるバサリという音が、つぐみを我に返らせた。このような話は公共の場であるのにふさわしくない。小声でキスをテーマにひそひそ話をするのがぎりぎりだ。

そこでつぐみは

「あたしの気持ちより、まずは伯母さんの気持ちでしょ？ 伯母さんは縫ちゃんのパパと結婚するつもりなの？」

と質問をかわした。

「そのつもりは無いよ。縫ちゃんがそれだけ反対してるんなら、無理に結婚したって面倒臭いし」

「じゃあ縫ちゃんが、賛成に回つたら？」

「そしたらそれから考える。実は縫ちゃんのパパとはさ、十四年前に付き合いがあった訳。向こうが北海道に転勤になつてご破算になつちやうた仲なんだけど、再会して付き合い始めてから、はまだ日が浅いのよ。だからそう焦ることはないしね」

貞子ののん気な返答につぐみは面食らつた。一体貞子は、自分をいくつだと思つているのだろう。つぐみは呆れながら

「じゃあ縫ちゃんがずっと反対してたらどうするの？ 伯母さん一生待ち続けるの？」

と尋ねた。いくら若く見えるとはいえ貞子はもう三十五なのだ。

「いやそんな長いこと待つ必要は無いと思うよ。思春期の女の子のフアザコンなんて、彼氏でもできれば一発で治るから」

「そういうもの？」

「普通はそういうもんよ。自分も恋愛をすれば恋愛をする親の気持ちも分かる。何より彼氏に夢中になつてパパのことなんて意識から飛んでつちやう。あの子割と可愛いし、ほつといつてもその内、彼氏できるでしょ」

余裕たつぷりな貞子の様子を見て、これが男と付き合い合っている女の自信というものなんだらうかと、つぐみは考えた。まだ誰とも付き合つたことのないつぐみにとっては、それはまるで未知の世界で、これ以上口を挟むことははばかられた。

その時バス停にバスが到着して、つぐみと貞子はバスに乗り込んだ。つぐみの隣に腰掛け目をつぶる貞子の姿は、やはり美しかった。弓なりにカーブする眉の下で閉じられたまぶたには、エクステンションをしている訳でもないのに、びっしりとしたまつ毛が生えそろい、薄く形の良い唇は口角が上がっている。

本当に美人は、傍から見る程、幸福ではないのだらうかと、貞子の言葉を思い出しながら、つぐみはしばし貞子の寝姿に見入った。

縫の父親の退院を待つことなく、地区コンクールの日はやって来た。つぐみが控え室でチューニングをしていると、苗美がやって来て「縫ちゃん今日もとうとう、来れなかつたんだね。朝練だけは欠かさず来てたのにな」

と残念そうな声を出した。

「何せパパが入院中だしね。まあどっちみち、まだ縫ちゃんの技量じゃステージに立つことは無理だったんだけど」

とつぐみは答えると、軽く溜め息を吐いた。縫が話題に上るだけでつぐみの心は鉛を飲んだように重くなる。

「何、ツグミン緊張してる？」

「うーん、先輩が抜けて初めて一人で立つステージだしねえ」

「それにしても顔色悪いよ。何かあった？」

苗美の勘の良さに思わず涙ぐみそうになりながら、つぐみは一連の話を伝えた。自分を気にかけてくれる友達という存在は、何とありがたいものなのだろうと思った。もともと自分の出生の秘密と、縫の父親が犯人かも知れないという話は伏せたけれど。

話を聞き終わると、苗美はうーんと首を捻り

「まあパパに、再婚して欲しくないって気持ちは分かるけどさ、縫ちゃんがいくらそう言ったところで、止める権利は無い訳でしょう？ だったら気心知れたツグミンと同居できることを、喜ばしいのになって気はするけどね」

と感想を述べた。

「でもさああの後、縫ちゃんとも朝練の時に話したんだけど、縫ちゃん的には伯母さんが、昔の彼女だったのが気に入らないみたいなんだよね。だったらママの立場はどうなるの？ みたいな、そんな心境みたいなのよ」

「成る程ねえ。まあ縫ちゃんもパパが災難続きでカリカリしてるんだろっしねえ」

「そのパパの災難もさあ、パパが伯母さんと付き合い始めたから、

ケチがつき始めたんじゃないかって思ってる節があるのよ。もう縫ちゃんにとつては、伯母さんなんて疫病神状態。そういうこと考えるところとほと参っちゃってさ」

そう説明しながらつぐみはふと、苗美に洗いざらい全てをぶちまけてしまえば、どんなに楽だろうと思つた。自分が今悩んでいるのは、縫が貞子のことを反対している件だけではないのだ。けれど核心を告げられないために、何を話しても鉛を飲んだような心の重さは一向に救われない。

いつそ全てを打ち明けてみようかという誘惑に、つぐみは駆られた。苗美は全てを聞いても、案外ひるまず良い相談相手になつてくれるかも知れない。秘密を守り続けることにつぐみはとても疲れてきた。楽になりたいと思う。この悩みを誰かに共有して欲しいと思う。

その時

「北中の皆さん、そろそろ待機して下さい」

との声がかかった。時間切れか。つぐみはコンバスを持つと皆と一緒になつてステージの袖へとそろそろ歩いた。中学生の群れ。右を向いても左を向いても中学生の群れ。ああやはりあたしの秘密は明かせないと思ひながら、つぐみはステージの袖で順番を待った。

あたしに今求められていることは、ステージを無事つとめること。プライベートな問題は全て忘れて演奏に魂を込めること。

何やら自分がプロの演奏家を気取っているようで、つぐみは自分を笑つた。他校の生徒は、自費で高価な楽器を用意している所も少なくないというのに、学校の備品である安物の楽器を使用する北中は、分が悪いのだ。それなのに心境だけは演奏家になっている自分が何やら滑稽だった。

演奏はつつがなく終わったが、北中の評価は金銀銅章の内の銀賞だった。ボロい楽器で銀賞が取れたのだから、まずまずだと思ひながらロビーを抜けると、東中の部員たちが目を赤くして泣き腫らしていた。彼らもまた北中と同じく銀賞を取つたのだ。

銅賞を取った学校もあるというのに、銀賞で泣いていたら、銅賞を取った学校の生徒たちの立場はどうなるのだろう。呆気に取られながら学校に戻ると、部員たちは顧問教諭にたっぷり油を絞られた。皆と一緒に頭をうなだれながら、つぐみはようやく、どうやら顧問教諭は金賞を狙っていたらしいと悟った。金賞受賞の学校の中から、県大会に出場する学校が選ばれるのだから、その候補にさえならない銀賞を取るなどということは、顧問教諭にとってはあるまじきことだったようだ。

その時つぐみはふと、ああこれぞ生活だなあと感慨にふけた。銀賞を取ったのは、果たして生徒だけが悪いのか。指揮者であり指導者である顧問教諭には責任が無いのかという思いも頭を巡ったが、しかしつぐみにとっては、そんなことはたいした問題ではなかった。伯母が付き合っている相手が、自分の母を犯した男かも知れないなどという事実比べたら、金賞を取れなかったと叱られている方が、余程正しい中学生の生活だとつぐみには思えた。

「銀賞だったそうですね」

と縫が言った。翌日の朝練の音楽室だった。

コンバスのチューニングを終えたつぐみと縫が、合同チューニングに備えて、コンバスを運び込んだ直後だった。ぱらぱらと集まり始めた部員たちの顔には、コンクールの緊張感から解き放たれただるい軽やかさがにじみ、音楽室の中は、先週末とは違った怠惰な義務感が漂っていた。心なしか辺りに響く各パートのチューニング音も、諦めを知った開放感を含んでいるような気がする。

そんな音色に同化しそうな気持ちとは裏腹に、やはり心の奥底に根付く失望を否定できないつぐみは

「うん。残念ながら」

と淡々と答えた。

「やっぱ金賞、取りたかったですか」

「そりやできればね。大会に向けて人差し指の指紋が無くなる程、練習した訳だし」

そう答えながらつぐみは、右手の人差し指を見詰めた。今回の課題曲のコンバスの楽譜は弦を弾く箇所が多かったため、何度も弦を指で弾いていた結果、人差し指の皮は剥け指紋が見えなくなってしまう。

けれどつぐみは、部活にそれ程打ち込んでいる訳ではない。練習はほぼ休まずに出るけれど、何が何でも金賞を取りたいという熱い思いは無かった。もちろん銅賞は恥ずかしいので避けたいと思っていたが、吹奏楽部は個人プレーではないため、自分一人が張り切ってどうなるものではない。

つぐみはただ音楽が好きだった。両親がいないことも、自分が伯母に育てられているという負い目も、音楽が自分の聴力に訴える力によって慰められた。悲しい旋律を奏できれば、種類は違って同じく悲しみを感じていただろう作曲家に親近感を持ち、また軽快なメロディーを奏できれば、その明るさに勇気づけられる心地がした。

どうせ部活が強制参加なら、音楽を奏でる吹奏楽部に入りたかった。だから楽器は何でも良かった。そして与えられたパートのコンバスに愛着も持っていた。つぐみはただ、音楽を奏でていられればそれで良かった。

だがもし部活が強制参加でなければ、つぐみは間違いなく帰宅部だった。家事を半分担うつぐみとしては、少しでも自分の時間が欲しかった。だからこの部活はつぐみにとって好ましい反面、自分を縛る場でもあった。そんな場でこうして隣に立つ縫を、つぐみはつかみどころの無い存在のように感じた。

少し前まで縫とは確かに仲が良かった。お互いの家を行き来もした。縫の父親が入院した際には見舞いにも行った。しかし見舞いの場で貞子と鉢合わせ、貞子が縫の父親と交際していることが明るみになった。父親の再婚を反対している縫は、あの場で烈火のごとく

怒った。

その出来事の後、朝練で顔を合わせると、縫は貞子が昔の彼女だった点が気に入らないと言った。つぐみはただ黙って縫の言い分を聞いた。

その後、縫が自分を避けるのではないかと思っていたが、縫は以前とあまり変わらない態度でつぐみに接した。幾分表情が暗いようにも思えたが、それは父親が入院中であるせいとも思えた。縫は放課後の練習に来なくなったが、それも父親が入院中のためという大義名分があった。お互いの家を行き来することも無くなったが、それもやはり父親が入院中で忙しかったためとも思われた。

だが実際のところ、つぐみには分からなかった。本心では縫はつぐみを避けたいのだがパートの先輩であるため仕方なく関わっているのか、それとも貞子の件は別として、まだ自分を慕う気持ちを残してくれているのか、つぐみにはよく分からなかった。

いずれにしろそれは、縫の父親の退院後に明らかになるように思われた。だが退院は数ヶ月先だ。つぐみはふと待てないと思った。縫が自分のことをどう思っているのかはつきりさせられなくなった。

その時貞子の

「思春期の女の子のファザコンなんて、彼氏でもできれば一発で治る」

というセリフが不意に思い出された。

縫に彼氏をつくってやりたい。そんな思いがつぐみの脳裏にひらめいた。縫が心に思う男がいるのなら、自分がキューピットになってその恋を成就させてやりたい。そうすれば縫は自分に感謝し自分を慕うだろう。貞子のことを認めるかどうかは別にしても、自分への好意は確実になるだろう。

つぐみは突如、この時間と今の縫との会話を、大切にしなければならぬという思いに駆られた。何とか上手く縫の好きな相手を聞き出せないものだろうか。

その時、自分の人差し指をぼんやりと眺めていた縫が

「指紋かあ。縫も入部したての頃無くなっちゃったなあ」

とつぶやいた。そうだ今は指紋の話をしていたのだとつぶみは現実に戻った。縫の想い人のことは、話の流れの中で上手く聞き出さなくてはならない。

「入ったばっかの頃は、指の皮薄いからすぐ剥けるよね」

「そうなんですよね」

「特に縫ちゃんって手の皮薄そう。つーか全体の皮膚が薄そう。肌全体が透き通ってるよね」

つぶみはとりあえず縫を褒めて機嫌を取ることにした。縫は

「えー、そうですね」

と照れたような顔をした。

「肌が綺麗な子って男子にモテるんだよね。縫ちゃん結構モテるんじゃないの」

「えー、そんなことないですよ」

「何、それは肝心の人にはモテてないってそういう意味？」

しめしめ上手い具合にこっちに話をもってこれたと、つぶみは内心ほくそ笑んだ。だが問題はここからだ。いくら話がこっち側に来たからといって、縫の側に打ち明ける気が無ければ、好きな男の名は聞き出せない。

すると縫は

「ていうか、肝心な人がそもそも、縫の存在を知ってるかどうか分からないんですよえ」

と透き通るような皮膚で覆われた頬を、薄桃色に染めた。

縫には好きな男がいる。つぶみは縫の頬の下で燃える血潮に、目を奪われそうになりながらも、辺りをそっと伺った。各々のパートのけだるいチューニングの音が響く音楽室で、つぶみたちの会話を聞いているらしき者は誰もいなかった。

つぶみは声をひそめると

「それ、誰？」

と尋ねた。縫は聞き取れない程の小さな声で答えた。

「先輩と同じクラスの、根野先輩」

一時間目の授業も二時間目の授業も、つぐみは上の空だった。それは朝練の時の縫の告白が、心を占めていたからに他ならなかった。いつものつぐみだったら

「あたしも、根野君が好き」

と言えたはずだった。

友人の中には

「わたしもあの人を好きだったけど、友達に先に言われちゃったから、協力するしかなくなっちゃって」

などと言う者もいたが、つぐみはそういった考えには賛同しかなかった。

スーパーの安売りの大根じゃあるまいし、早い者勝ちということはあるまい。友達に宣言されてしまったら、すぐさま「あたしも」と言えば良いだけのことなのだ。

しかし先程、つぐみは縫に「あたしも」とは言わなかった。縫の恋を応援しようという前提で好きな相手を尋ねたため、縫の口から出た意外な名に、思わずだんまりを決め込んでしまったのだ。

そもそもつぐみは、縫の好きな相手というのは、同じ一年生だろうと勝手に決めてかかっていた節があった。今考えてみれば何の根拠も無い話なのだが、そう思い込んでいたために、まさか根野の名前が出るとは思わなかったのだ。

縫は一体いつ根野を見初めたのだろう。そう考えるつぐみの脳裏に、先日行なわれた野球部の対外試合が思い出された。あの試合に、吹奏楽部員たちは応援に駆り出されたのだった。授業扱いだつたため縫もあの場にいた。

けれどあの試合で、北中の野球部はコールド負けをしたのだ。根野にしたって三振で終わってしまい、良い所を全く見せられなかつ

たというのに、一体縫は何が良くてあんな男を気に入ったのだろうと、つぐみは自分のことを棚に上げて考えた。やはり自分たちは腹違いの姉妹なんだろうか。そんな思いがつぐみの頭をかすめる。姉妹だからこそ男の好みも似ているのだろうか。

だが縫が、根野をいかなる理由で気に入ったのかということは、今はたいした問題ではなかった。問題なのは、つぐみも根野を好きなのにそれを打ち明けなかったということなのだ。

先程言わなかったのだから、今更もう言い出せないとつぐみは思った。どうせ自分からアタックする気は無いのだし、言わなくても問題はあるまい。

しかし苗美を始め、複数の女友達が自分の気持ちを知っていることに、つぐみは思い当たった。よもや彼女たちがわざわざ縫に告げるとは考えにくい。根野とつぐみが言葉を交わした後などに、冷やかされるということは起こり得る。彼女たちはつぐみの想いを、縫に対して伏せなければならぬとは考えていないから、冷やかされる現場を縫に見られる可能性は、大いにある。

そんな現場を見たら、縫はどう思うだろうか。縫は自分の恋する相手は根野だとつぐみに告げたのだから隠し事をされたと腹を立てるに違いない。いやそれどころか、根野を巡るライバルとして、つぐみを敵視することも考えられる。

縫との関係を改善するために、縫から想う男の名を聞き出したというのに、一体なぜこんなことになってしまったのだろうか、つぐみは頭を抱えた。これでは状況は悪化するだけではないか。

つぐみは頬杖をつく、無心にノートをとる根野の姿を眺めた。幸いなことに根野の席はつぐみの隣だったから、縫は横目でたつぷりと根野を観察することができた。客観的には中の上くらいの顔立ちだということは分かっているけれど、あたしにとっては、世界一カッコイイと思う。根野と一緒にいられるのなら奴隷生活を強いられても良いと思う。

つぐみは目をつぶると、自分が根野と二人で歩いている姿を想像

した。その時頭の中で根野の隣を歩く自分の姿がスツと縫の姿に入れ替わった。その時つぐみはあつと思つた。すり替えだ。

もしできることなら根野と付き合いたいと思う。でもモーシヨンをかける勇気が無い。けれど縫のためだったらできるかも知れない。縫はあたしではないから、縫が振られてもあたしは傷付かない。

そして縫が、もし根野と付き合うことができたなら、あたしはそれをすり替えて喜ぶことができるかも知れない。姉妹のようにそっくりだと皆に言われる縫が、根野と付き合うことができたなら、あたしはそれをすり替えて喜ぶことができるかも知れない。あの手の顔なら良いのだと、本当はあたしでも良かったのだと、自分を納得させることができるかも知れない。

やはり当初の計画通り、縫の恋を応援しようとしてつぐみは決意した。その決意の裏には、自分は強姦により誕生したのだという引け目が隠されていた。

縫はもう一度根野を眺めた。根野は教科書に視線を落としていた。先程より根野が自分に近づいたような気がした。本当は遠のいたのに、つぐみは根野が自分に近づいたような気がした。

翌日の昼休みに、縫はつぐみのクラスにやって来た。前日の内につぐみが縫に打ち明けた計画を、実行するためだった。

縫は教室の入り口で立ち止まると、手ぐしで素早く前髪を直し、入り口付近に着席していた生徒に、つぐみが命じた通り

「近山先輩は、いますか」

とはきはきと声をかけた。

その声を聞くと、つぐみは

「縫ちゃん。こっちこっち」

と手を振った。

教室ではちょうど、皆が給食を食べ終えた頃で、根野も食器と盆

を下げに行つたところだったが、すぐに席に戻つて来ることは分かつていた。つぐみと縫は部活の話をしながら根野の戻りを待った。

根野が席に向かつて来た場合に、つぐみは「根野君」と声をかけた。根野は「何だよ」と面倒臭そうに返事をしながら、自分の席に着いた。

「この子コンバスのあたしの後輩なんだけど、あたしにめっちゃ似てるでしょ」

その声にクラスの何人かの者が振り向き、つぐみと縫の顔を見比べた。そして周囲からは「似てる、似てる」の声が上がった。

計画通りだと、つぐみはほくそ笑みながら

「ねー、びっくりでしょ。吹奏楽部では『コンバス姉妹』って呼ばれて有名なんだよ」

と根野に畳み掛けた。事実その呼び名でつぐみと縫は形容されてきた。

根野は二人の顔を見比べると

「確かに似てるけど、この子の方が可愛いじゃん」

と縫を指してニヤリと笑った。つぐみは心臓が破れるような思いで

「『この子』じゃないの。西海縫ちゃん。ちゃんと名前覚えてあげて」

と少し威張つた口調で説明した。

「へえ、ぬいっていろいろ」

根野が少し興味を示したような反応をした。つぐみは

「縫ちゃん。漢字説明してあげて」

と縫に、話を振った。

「あ、糸偏の……、縫い物の縫です」

縫が恥ずかしそうに説明すると、つぐみは

「ねえ？ さすがあたしの妹だけあって家庭科の得意そうな女の子っぽい名前でしょ？」

と援護した。

「何だよ。近山、家庭科得意だったのかよ。初耳だな」

と根野がからかうように言った。つぐみは

「そりゃあもちろん、調理実習で食べるのは得意中の得意」
と更に威張った。本当は作る方も得意だったがそれは今言っ
てはならないことだった。

その時、縫が

「じゃあつぐみ先輩。また」

と声をかけた。つぐみは

「あまた。部活でね」

と手を振った。

初回はこれくらいで良いと思った。とりあえずこれで根野は、縫の顔と名前は覚えた訳だ。あとは縫の頑張り次第だろう。

見ると根野は、もう二人のことなど忘れたように男子生徒と教師の噂話に興じていた。その姿を見るとつぐみの心はずいいた。ねえ根野君。さつき『この子の方が可愛い』って言ったのは本気でそう言ったの？ それともそれは冗談だったの？

あれが本気だったのか冗談だったのか、そのどちらが自分にとって望ましいことなのか分からなくなりながら、つぐみは胸の内です返ってくるはずの無い問いをもてあましていた。

これまでつぐみは、自分から根野に話しかけたことが一度も無かった。席が隣だったから話しかけようと思えばいくらでもチャンスはあったのだが、照れ臭くてできなかつた。会話はいつも、根野からの発信で始まっていた。そして根野は毎日必ずつぐみに話しかけてくれていた。

だからこそつぐみは、話しかけようとさえ思えば、いつでも根野に話しかけられる状態にあった。それだからこそつぐみはこの計画を練った。縫を根野に紹介するための計画を。初めて根野に話しかけるといふ機会を、縫のために使った。

何だか自分が、取り返しのつかないことをしてしまったような気がした。自分のためなら出ない勇気が、他人のためなら出ることが不思議だった。それは別に自分の優しさゆえではないのだ。つぐみ

は結局、自分のために出す勇気が失敗することが怖かった。縫のためだからこそ、失敗を恐れずにいられたのだ。

その時ふとつぐみは、縫の家で見せられたコンドームを思い起こした。びっくりするくらい薄いのに、まるで猥雑な秘密を隠し持ったかのようなゴム製品。今しがた自分がした行為によって、いつの日か強姦ではなくお互いの合意により、縫と根野があこのコンドームを使う日が来るのかも知れないと、つぐみは思った。縫の「付けて」という声が脳内に響き渡った。

その声は縫の自宅で聞いた無機質さは無く、甘い恥じらいと積極性が込められていた。避妊や性病予防のために付けてくれというよりは、むしろ付けた後の行為をねだるかのような能動性が、淫靡に粘っていた。つぐみは想像の中の縫の自発性にたじろぎながら、もし縫と根野がセックスをして、縫からそれを打ち明けられたら、自分はその行為も自分にすり替えようとするんだろつかと考えた。

その仮定はつぐみの胸を苦しくさせた。けれどその苦しみが、セックスへの拒絶反応によるものか、それとも嫉妬によるものか、つぐみには分からなかった。

つぐみの口の中は苦いもので満たされた。だが注意深く舌を転がすと、そこには確かに僅かな甘さが潜んでいた。その甘さが何によってもたらされているのか、つぐみには分からなかった。

学校からの帰り道、つぐみは苗美に

「やったじゃん。作戦成功したじゃん」

と声をかけられた。まさかもう縫サイドからの情報が流出しているのかと驚きながら、つぐみは

「何のこと？」

と尋ねた。

「昼間縫ちゃん使って根野君に話しかけたじゃん。話しかけるきつ

かけ作りに、縫ちゃんに協力してもらったんでしょ？やるじゃん」
のん気そうに笑う苗美を眺めながらつぐみは、ああ苗美は勘違い
していると思った。だがそれは無理も無いことだった。一昨日まで
つぐみは、一日も欠かさず本日の根野との会話を苗美に嬉しげに報
告していたからだ。

つぐみはバツの悪い思いで

「違うよ。あれは縫ちゃんを根野君に紹介するためだったの」
と告白した。

「え、何で？」

「縫ちゃん、根野君のこと好きなんだって」

「だからって何で？ ツグミンだって根野君のこと好きなんでしょ
？」

苗美の疑問はもつともなことだった。だからつぐみは

「あたしは根野君のこと冷めちゃったの。そしたら縫ちゃんが根野
君好きだって言うから、丁度いいと思って」

と嘘をついた。

「何で？ だって一昨日までツグミンそんなこと言ってなかったじ
ゃん」

「そうなんだけどね」。何か急に冷めちゃって」

「まさかツグミン、後輩に遠慮して自分の気持ち抑えてる訳じゃな
いよね？」

勘の良い苗美につぐみは一瞬冷や汗をかいたが、すぐに平静を装
うと

「まさか、そんなことある訳ないじゃん」

と胸を張った。縫に根野をゆずったのは、先輩だとか後輩だとか
そんな関係によるものではなかった。つぐみはただ縫の歡心を自分
に戻したいだけだった。いずれもしかしたら、貞子と縫の父親は再
婚するかも知れない。その時のためにも、縫と良好な関係を築くこ
とは、つぐみにとって必要なことだった。

つぐみの心を知らない苗美は

「それにしたって切り替え早すぎない？ 一昨日まであんなに、根野君のときゃあきやあ言ってたのに、その二日後には縫ちゃん根野君をくっつけようとするなんて」

と呆れたようにつぶやいた。

「いやホントはさ、もつと早く冷めてたの。でも好きな人いないとつまんないじゃん？ だからずっとあたしは、根野君を好きっていうことにしてたんだけど、縫ちゃんから根野君が好きって話聞いたら、何かそれが決定的になって冷めたっていうか」

「まあわたしも、ライバルが現れると途端にやる気が失せるタイプだから、気持ちは分かるけど」

「そうそう。そうなの。何か面倒臭くなるんだよね」

そう答えながらつぐみは、あたしはひよっとしたら、本当に面倒臭くなったのかも知れないと思った。

自分が強姦により誕生したと知った時から、多くの出来事がつぐみを襲った。それらの出来事によって、つぐみは疲れてしまった。

それでも昨日までは、根野への恋心がつぐみをリフレッシュさせてくれていた。別にこの恋を成就させようという積極的な想いは無かったけれど、根野と言葉を交わすだけで、つぐみは天国にいる心地だった。根野とのことだけは、つぐみにとっては別世界の出来事だったのだ。

けれど縫の想いを知り、根野は別世界の出来事ではなくなった。

だからつぐみは面倒臭くなった。根野はもうつぐみに完全な天国を与えてくれない。だとしたらいつそ手放してしまった方が良くはないか。

つぐみは心の中でバイバイ根野君、とつぶやいた。

根野君のこと大好きだったよ。根野君のためなら死んでも良いと思ったよ。大人は笑うかも知れないけど人を愛するってこういうことかと思っていたよ。でもバイバイ根野君。縫ちゃんのことを無くたって、強姦によって生まれたあたしのことなんて、あなたは好きになってはくれないでしょう。黙っていれば分からないかも知れな

いけれど、黙っていても事実が事実として存在する。

万に一つ、根野君があたしに「好きだ」と言ってくれたとしても、あたしは自分の秘密が後ろめたくて、あなたと一緒にいるのが辛くなるでしょう。だったらいつそあたしは縫ちゃんのせいにして諦めたいの。あたしの出生が原因じゃない。縫ちゃんが原因であたしの恋は成就しないだと思いたいの。だからお願い。もしあなたが誰かと付き合うのならあの子にして下さいな。あたしとかんばせの似たあの子にして下さいな。

心の中で根野に語りかけながら、ふとつぐみはこういうことなんだと思つた。こういうことなんだ。強姦によつて生まれるということとは。伯母さんにそれを聞かされて三日間あたしは学校も休んでずつともがき苦しんでいたけれど、でもその事実が呼ぶ苦悩の全てを理解していた訳ではなかつた。

けれどこういうことなんだ。強姦によつて生まれるということとは。それを知つた時の衝撃だけじゃない。その後の人生にこうして関わってくることなんだ。

不意に足元に竜巻が起きたような錯覚に陥つて、つぐみは足を止めた。苗美が振り返つて「どうしたの」と尋ねた。

「何でもない」と答えてつぐみは再び歩き始めた。何度地面を踏んでも、竜巻が足元に絡みついていようような感覚が消えなかつた。つぐみは逃れようと足を速めた。けれど自分が一体何から逃れようとしているのか、つぐみにはよく分からなかつた。

その日以降、縫はちよくちよく昼休みにつぐみの教室を訪れるようになった。つぐみはもう根野に対して冷めたのだという話は、女友達の間で広まっていたから、好奇心旺盛な彼女たちは、頼まれてもないのに、縫と根野をくっつけようと小細工まで弄するようになった。

皆まだ幼い女子中学生たちだった。自分の恋を仕掛けることには臆病になるくせに、他人の恋には積極的だった。彼女たちもまた、他人の恋を操ることによって来るべき日のための練習をしているのかも知れなかった。

縫が訪れることが日常になり、縫と根野が自然に言葉を交わすようになってからも、つぐみには根野が、縫のことをどう思っているのか計りかねた。縫が現れるようになってからも、根野のつぐみに対する態度は変わらなかつたし、縫に対しても対応がはっきりしなかつた。

そんな折、苗美が一つのニュースを運んで来た。根野が隣のクラスの灰原ひずるに告白して振られたというのだ。

朝練が終わり教室へと向かう道すがらだった。つぐみは声をひそめて小さく叫んだ。

「それってホントの話？」

「みたいだよ。さつきフッキーに聞いたの。フッキーひずるちゃんと仲いいじゃん？ 何か昨日告られたらしいよ」

フッキーというのは、苗美と同じサックスの二年生だった。フッキーはひずると同じクラスのため、ひずると仲が良い。

「じゃあそれ、マジ情報だね」

「だよ。でも根野君てかなりな面食いだね。ひずるちゃんって学年で一番可愛いって評判じゃん」

「フーかちよつと、身の程知らずじゃん？」

つぐみは腹を立てながら根野を罵った。顔がせいぜい中の上クラスにくせに、コールド負けをしたくせに、縫を紹介してやったというのに、わざわざ難攻不落な高嶺の花に向かっていった根野に腹を立てた。

ちくしょうやっぱり顔なのかと、つぐみは思った。実際に根野がひずるのどこを気に入ったのかは分からないのだが、つぐみは顔だと決めつけイラついた。あたしの顔じゃ駄目なのか。あたしに似た縫の顔じゃ駄目なのか。

教室に入ると根野は、普段通り友人たちと談笑していた。その快活な笑顔からは女に振られた憂鬱さは微塵も感じられない。

つぐみが席に向かうと、根野はひょいとつぐみの方へ顔を向け

「近山、数学の宿題やって来た？」

と親しげに尋ねた。

「うん、一応」

「午後までに返すから、ノート見せて」

「いいけど」

つぐみはバッグからノートを取り出して、根野に渡した。渡し方は少々乱暴だったが根野は友人たちとの会話に夢中で、つぐみの態度に気付かずノートを机の中にした。

そりゃあ数学の授業は午後だけど、どうせ今、暇なんだから、くつちゃべつてないでさっさと写せばいいじゃない。

つぐみはプリプリしながら、教科書や文房具をバッグから机に詰め替えた。恋に破れたというのに、変わらない根野が許せなかった学年で一番可愛いという女に惚れるという単純なことをやらかし、振られても尚、平然としている根野が許せなかった。

ふと縫を根野に紹介した日に、根野に心の中でバイバイを言ったことを思い出した。あの日つぐみは悲哀と共にいた。根野を諦めることが切なかつた。けれど現実はどうだ。縫のことなど無関係に、根野はひずるに想いを寄せていた。つぐみは自分の独り相撲が何やら情けなくなつた。

その後、午前の授業の間中、つぐみは縫に何と言つたものかと考えていた。問題なのは今日の昼休みも、縫が来るかも知れないということだ。とりあえず縫が来たらただちに廊下に引っぱり出して、ひずるの件を告げるしかない。縫はショックを受けるだろうから、今日はそのまま帰ってもらつた方が良さだろう。

だがその日の昼休み、縫は姿を現さなかつた。大体が毎日来ていた訳ではないのだからそう珍しいことではない。つぐみはホッと胸を撫で下ろしたが、しかしそれは面倒が後回しになつたというだけ

のことだ。

縫は今日も放課後の部活を休むだろうから、帰宅してから連絡するしかない。ケイタイは毎朝登校時に教師に回収されて、下校時に返されるシステムだ。そこで問題になるのは連絡手段だった。電話で伝えた方が良い気はするが、縫は父親の病院にいてケイタイの電源を切っている可能性が高い。だとしたらやはりメールで伝えるべきだろう。その場合どういった文章で伝えたら良いだろうか。

そんなことを考えていたら突然何かが割れる音がした。考え事に気を取られていて、片付けようと思っていた試験管を割ってしまったのだ。

片付けの済んだ班の生徒たちは、もう理科室を出ようとしていた頃合だった。もうすぐ次の数学が始まるというのについてない。

早く片付けなければと思いつつ、つぐみは試験管の破片に近づいた。それは窓から差し込む夏の陽射しに反射して、眩しいばかりにきらめいていた。思わずつぐみはその光景に見蕩れた。

輝く試験管の破片。鋭利な形。もしこれを血管に宛がえばつぐみの体からは鮮血が噴出するだろう。血を流したいとつぐみは思った。いとわしい自分の血潮を全て絞り出して星のように風のように清浄になりたいと思った。

けれどつぐみはすぐ我に返ると、理科の教師に向かって

「すいません。試験管割りました」

と手を挙げ掃除ロッカーへと急いだ。こんな観衆の中、試験管の破片を取り上げ肌を裂いたりしたら、つぐみは奇人だと思われるだろう。

その時、根野が、

「数学のノートのお礼に、手伝うよ」

と声をかけてきた。つぐみが黙って根野の顔を見詰めると背後で理科教師が

「何だ根野、宿題、人のノート写してるのかあ」

と間延びした声を出した。

「違いますよ。先生。休んでた時のノートです」

根野の返事に、つぐみは嘘つきと思いながら頬が緩むのが止められなかった。自分の失敗の後始末を、根野が手伝ってくれる。先程まで根野に対して抱いていたつぐみの怒りは一気に凍解した。

「それじゃあ片付けはこの二人に任せて他の者はさあ行った、行った」

と汚れが目立つ白衣を揺らしながら、理科教師が他の生徒たちを急かした。いつの間にか理科室には、つぐみと根野と理科教師の三人だけになった。

つぐみがほうきとちり取りを持って現場に戻ると、大きな破片は、理科教師と根野の手によって、あらかた片付けられていた。

薄汚い白衣をまとった理科教師の存在を、つぐみは心から邪魔に思いながら、残ったガラスくずをちり取りに集めゴミ箱に捨てた。汚れが目立つからこそ清潔にしなければならぬ白衣を、頓着せずにつぐみが目立つに任せている教師と一緒に、神秘的な理科室という舞台装置に、せっかく根野と二人でいるという事実が、全く台無しに思われた。

掃除ロッカーにほうきとちり取りを戻すと、理科教師は

「さあさあ、二人共行った、行った。次の授業始まるぞ」

とつぐみと根野を理科室から追い立てた。理科室のドアを閉めた瞬間、次の授業が始まったことを知らせるチャイムが鳴り響いた。どのみち理科教師がいてもいなくても、理科室にいつまでも二人きりでいる訳にはいかなかったのだなとつぐみは諦めた。

根野は走り出すのだからと、つぐみは思っていた。先程の一瞬の幸福も時間に縛られる中学生には味わっている余裕も無い。けれど根野は、つぐみに「行こう」と声をかけのろろと歩き始めた。もう授業が始まっているのに、この人はどうして走らないんだろうと思ったが、根野を置いて一人走り出す訳にもいかず、つぐみも根野の隣をのろろと歩いた。

うんざりする程のんびりとした足取りで、根野は教室へと向かっ

た。一体なぜこの人はゆっくりしているんだろうとつぐみは思った。もしかしたらあたしと、一緒にいたいんだろうか。そんな考えがふつと頭に去来したがすぐにつぐみは首を振った。この人はひずるが好きなのだ。だから断じてそんなことは無い。根野はおそらく数学の授業になるべく遅れて行きたいんだろう。

根野の心中を察してもつぐみは幸福だった。この人は少なくとも、数学の授業よりはあたしと共に歩くことを望んでくれている。それだけでつぐみは充分だった。

つぐみはふと、片付けを手伝ってくれた件について礼を言おうかと、根野の横顔を伺ったが、薄い唇を真一文字に結んでいる表情にぶつかり勇気を失った。自分が何か言葉を発することで、今のこの空気が壊れてしまうことも恐ろしかった。

つぐみは礼を言うことを諦めると根野と二人で歩き続けた。根野と二人で歩く。以前授業中に夢想していた出来事が現実になったのだ。つぐみはこの現実に酔っていた。このまま時間が止まってしまえば良いと思う。根野と二人でなら、どこまでも歩いて行けると思う。

階段の踊り場で根野は突然足を止めた。つぐみは何事かと思いいながら振り返った。すると根野がつぐみの瞳をまっすぐ見詰めてこう言った。

「俺と、付き合ってくれないか」

つぐみの視線は根野に捕らえられ、しばらくつぐみは立ちすくんだ。瞳から根野がぱあっと入り込んできたような気がして、つぐみは羞恥で顔が燃え上がった。逃げ出したいと思った。とにかくこの場から逃げ出したいと思った。つぐみは咄嗟に

「数学のノート」

と口走った。根野が「え？」と尋ねた。

「数学のノート、返して。教室戻ったら。数学、始まってるでしょ」

「あ、ああ」

拍子抜けしたような根野の返事を聞くと、つぐみは階段を駆け上

がった。今この場を逃れたところで、たどり着いた先の教室での席は隣だというのに、つぐみはなぜか走らずにいられなかった。

「はあ？ 根野君に告られた？」

放課後の教室だった。窓からは黄ばんだカーテン越しに威勢の良い陽射しが降り注ぎ、室内を明るく照らしている。本来なら部活に出なければならぬのだが、つぐみはとてもそんな気にならず、苗美を誘って教室に居残っていた。

つぐみの報告に驚きの表情を浮かべた苗美は

「だって根野君、ひずるちゃんに振られたばっかじゃん」

と続けた。ひずるに振られた翌日につぐみに告白するという根野の心境は、つぐみにも苗美にも理解しかねた。

「そうなの。根野君、一体何考えてるんだろう」

「それでツグミンは、何て答えたの」

「何か頭、真っ白になっちゃって、『数学のノート返して』って」
答えながらつぐみは、一体なぜ自分はそんな返事をしてしまったんだろうと考えた。なぜはつきりと断らず無関係なことを言い出したのか。断りたくなかったのか。前日に別の女に振られた男の告白を断りたくなかったのか。

苗美は何が何だかよく分からないという顔をしながら

「何、それ」

と尋ねた。今の苗美にとっては根野も謎だったが目の前にいるこの友も充分謎だった。

「今朝、数学のノート貸してって言われて貸しっぱなしだったから」
「それにしたって、何でそんな時に数学のノートなの」

「分かんない。頭が混乱してたと思えない。だって突然そんなこと言ってくるんだもん。昨日ひずるちゃんに振られた人がまさかそんなこと言ってくると思う？」

けれど原因はそれだけではなかったとつぐみは思った。つぐみは根野が好きだった。だから正直に言つて、根野からの告白にときめいた。だがひずるの件もありそんなことでときめいている自分が嫌だった。また頭には縫のこともあった。縫の根野への想いを応援している最中に受けた根野からの告白は、嬉しい反面、つぐみにとつては厄介な出来事でもあった。

しかし根野への恋愛感情は、もう消えたと苗美に言ってしまった。今となつては、その複雑な胸の内を明かすことはできなかつた。

苗美はさっぱり分らないという態度で

「気持ち分かるけど、でも何でハッキリ断らなかつたの？ 根野君のことは冷めたんでしょ？」

と尋ねた。冷めた上に昨日ひずる振られた相手に思わせぶりな言動をとつたつぐみが、苗美には不可解だった。

「やっぱはつきり断つた方がいいかなあ。あたしが別の話題にすり替えたことで、遠回しな断りつて伝わらなかつたかなあ」

「もしかしたら伝わってるかも知れないけど、伝わってなかつたらどうするの。やっぱりここはちゃんと、断つた方がいいんじゃない？」

「でもこつちからその件、言い出しにくいんだよね。向こうがまた言ってくればいいけど、自分からその件持ち出すのは何か言いにくい」

そう答えた時つぐみはようやく理解した。つぐみは根野と付き合う訳にはいかない。何より強姦によつて誕生したという引け目があるし、昨日根野が、ひずるに振られたばかりだという点も気に入らない。また縫の恋を応援していた自分が、今更、根野と付き合う訳にはいかないという思いがある。

だがつぐみはまだ根野が好きだった。一年生の頃からずっと片想いしていたのだ。つぐみは根野の愛用の、シャープペンシルにまで嫉妬していた。シャープペンに成り代わりたかつた。根野のお気に入り文具になつてずっと根野の側にいたかつた。人間であること

を止めても構わないと思う程、つぐみは根野に焦がれていた。

だからつぐみは、あの時話をすり替えたのだ。付き合う訳にはいかないと言われた事実、ほんのしばらくの間うつとりするために。根野に再度の告白をさせるために。

つぐみがようやく自分の心を悟っていると、苗美は

「まあ言い出しにくいのは分かるよ。だったら……、根野君がまた言ってくるのを待ってそれで断ったら？」

と提案した。苗美にとってはこれが妥協案だった。

「でももう何も言っただけなら、どうしよう」

「そしたら多分、ツグミンのこと諦めたってことだから、それはそれでいいんじゃないの」

苗美の言葉につぐみは傷付いた。根野の自分への思いは、そんなにもいい加減なものなのかと、いい加減な返答をした自分を棚に上げてつぐみは考えた。だが根野の気持ちがいい加減なものであることは、すでに分かっていた。昨日女に振られたばかりの男の告白が誠意あるものとは考えられない。つぐみは長いこと恋い慕っていた男の不誠実さに、更に傷付いた。

そんなつぐみの心境も知らず、苗美は

「それより縫ちゃんにはどうするの。このこと言うの？」

と尋ねた。確かに縫の存在はこの際無視できなかつた。

「縫ちゃんに言わなきゃいけないかなあ？ 言い辛いよ」

「まあ、確かにね」

「根野君がひずるちゃんに振られたことだけを言うんじゃ、駄目かなあ？」

できればつぐみはそうしたかった。根野への恋心をひた隠しにしてまで、縫の恋を応援していたというのに、あんないい加減な告白のせいで縫に逆恨みをされてはかなわない。

すると苗美は

「じゃあツグミンが告られたことは黙ってれば？ ツグミンが根野

君と付き合う気が無いのなら、黙っててもばれないでしょ。他の人にはこのこと言っていないんだし」

と提案した。つぐみはうなずいた。苗美は口が固いため信用できるだろう。

そうして二人は、ひずるの件だけをつぐみが縫に報告することを確認すると、遅ればせながら部活に出ることにした。顧問教諭は大会の結果や演奏の出来栄には厳しいが、放課後の部活に、たまに遅れるくらいのことでは、機嫌を損ねるようなタイプではなかったから、その点は二人共気が楽だった。

苗美にトイレに寄るから先に行っていてくれと言われたつぐみは、一人音楽室へと向かった。一人になると先程の根野の言葉が浮かんでくる。俺と、付き合ってくれないか。俺と、付き合ってくれないか。

もしひずるの件を聞いていなければ、あたしはひよつとしたら、「はい」と答えたのかも知れないとつぐみは思った。そうしたら今頃あたしは、どんなに幸福だっただろうと思う。だが縫の存在がある。やはり縫に気兼ねしてあたしは幸福を満喫できなかっただろうと考える。

考えようによっては、ひずるの件を聞いていて、良かったのかも知れないとつぐみは思った。ひずるの件が無くて、縫の恋を応援していた立場上、根野の告白に応えることができなかった自分だ。どうせ根野が手に入らないのなら、根野がいい加減な男なのだということを知った方が気休めになる。根野など惚れるに値しない男だと思った方が、気が楽だ。

しかしつぐみは、自分の根野への恋情が全く冷めていないことを感じていた。あんないい加減な男の何が自分を揺り動かすのか、つぐみは不思議でならなかった。

その時渡り廊下の途中で、つぐみは根野と行き会った。根野は部活の途中で水飲み場に向かうところだった。

ぎくりとして立ち止まったつぐみに、根野は「よう」と声をかけ

ると

「昼間言ったあれさ、取り消すわ。やっぱ今までのまんまでいいや」と軽やかな笑顔で言い放ち、駆けて行った。

つぐみは呆然とした表情のまま、ユニフォーム姿の根野の後姿を見送った。根野の姿が校舎の陰に隠れた後も、つぐみは放心したまましばしその場に佇んだ。

結局その日、つぐみと苗美は放課後の部活に出なかった。トイレから出て来た苗美をつぐみが再び教室に連れ込んだからだ。

つぐみの報告を受けると、苗美は

「何それ。意味分かんないんだけど」

と叫んだ。根野のここ二日の言動は、一般的な女子中学生である苗美の理解を超えていた。

「でしょ？ 数時間前に告ってきたくせにその日の内に取り消してどういうこと？ あたしからかわれた訳？」

「でもからかったってしょうがないじゃん。ツグミンいじられキャラじゃないし」

「そう？ 先月学校を三日休んでから登校したら、根野君に『ズル休み』って言われたじゃん？」

そう尋ねながらもつぐみは、別に自分が、自他共に認めるいじられキャラだと考えていた訳ではなかった。他のクラスメイトには普段から特にかかわれるということはない。ただ根野だけは席が隣のせいか時折つぐみをからかった。つまり根野個人にとっては、自分はいじられキャラだったのではないかと、つぐみは思った。

けれど個人が、特定の誰かをからかう際は、相手がいじられキャラかどうかなどということとはあまり関係が無い。だから苗美は

「それはただ単に、根野君がツグミンに話しかけたかったんでしょ」と答えた。

「何で、話しかけたかったんだろ」

「それは告つてきたくらいだもん。ツグミンのこと好きだったんだよ。多分ひずるちゃんの次に」

「じゃあ何で、突然取り消してくるの」

つぐみは泣きそうな気分になった。普段から根野の一挙一動に、一喜一憂していたというのに、今日の根野の言動は振り幅が大きすぎる。これでは心がついていかなかった。

すると苗美は「うーん」と唸った後

「あれじゃない？ ツグミンが数学のノートがどうとか言って、ちゃんと返事しなかったから、あ、こりゃ振られたなと思って、でも恥かくの嫌だから、だったら取り消しちゃえみたいなそんな感じじゃない？」

と推測した。

「えーだとしたら、根野君ですごくヤな奴じゃん」

「とつくにヤな奴じゃん。ひずるちゃんに振られた次の日にツグミンに告るんだから」

「そりゃあ、そうだけど」

そんなヤな奴を自分は好きだったのかと、つぐみは愕然とした。いや告白を取り消され一番の友人である苗美にヤな奴だと断定されても尚、未だ根野を嫌いになれない自分が一体何なのか、訳が分からなかった。

つぐみがすっかり自分を見失っていると、苗美は

「てゆうかツグミン良かったじゃん。そんなヤな奴のこととつくに冷めてたんだから。もし冷めてなかったら、告られた時にOKしちやったかも知れないでしょ？」

と元気づけるように言った。

「んー冷めてなくても、ひずるちゃんに振られたって聞いた時点でもうOKしないよ」

「そう？」

「だってヤじゃん。ひずるちゃんに振られたこと知ってる人は知っ

てると思うし、『根野君はひずるちゃんに振られたから、仕方なく近山さんと付き合ってるらしいよ』なんて噂されたら」

そうだ。全てはひずるのせいなのだ。とつぐみは思うことにした。ひずるなどちよっとぐらい美人だからといって、根野を振ったりして気に入らない。根野はひずるに振られた哀れな被害者なのだ。そう思えばまだ根野を好きでい続けても構わないような気がした。

告白を取り消されたショックからつぐみが自分勝手な考えに駆られていると、苗美は

「そうだよ。ひずるちゃんにも何となく馬鹿にされそうだしね」と同意した後

「それでどうするの？ 結局、根野君に告られたこと縫ちゃんに言うの？」

と尋ねた。

「告つてすぐ取り消すようないい加減な人だつて、教えてあげた方がいいのかなあ？」

「んー、取り消されたんだから逆恨みされることは無い気がするから、教えてあげた方がいい気もするけど、取り消されたんだから言う必要も無い気もする」

「じゃあとりあえずひずるちゃんのことだけ言つて、その反応で決めるよ」

つぐみは体の芯に染み渡るような疲労を感じた。今日は一体何と一日だろう。朝、前日根野がひずるに告白して振られたと聞かされ、午後の授業中に根野から告白され、放課後になった途端に、告白を取り消された。

こんなことが起きては、自分の動揺をなだめるだけで精一杯だ。というのに、縫に自分が告白されたことを言うべきか否かの問題まで浮上して、つぐみはうんざりした。仮に自分が告白されたことだけは伏せるにしても、ひずるの件を告げるだけでも気が重い。

縫の恋を応援しようなどと思わなければ良かったと、つぐみは後悔した。そもそも縫の歡心を買うために恋を応援しようとしたこと

が、姑息だったのだと思い当たった。そんなことをしてまで縫に好かれようとしていた自分が、みっともなく感じられた。

部活に出ることを諦め、バッグを持って苗美と共に正面玄関を抜けると、校門の脇で向日葵の花が黄色く揺れているのが見えた。誰が種を蒔いたのだろうかと思っ。

蒔いた種は刈らねばならない。そんな言葉を思い出しながらつぐみは校門を出た。向日葵の花が、黄色く揺らめきながらその姿を見送った。

散々文面を迷った挙句、ようやくメールを作成すると、つぐみは縫のケイタイに送信した。簡潔に根野がひずるに振られたことだけを取り急ぎという形で文章にまとめた。後は縫の出次第だと思っ。それを受けて縫が根野を諦めるなら慰めれば良いし、それでも頑張ると言うなら、自分が告白されたことを話さなくてはならない。

どうかもう根野を諦めて欲しい。そう願いながらつぐみはベランダに出た。昨夜貞子が干した洗濯物が、そろそろ夕方の湿気を帯びてくる頃だ。取り込んで畳んでおかなければならない。

テレビを点け取り込んだ洗濯物を畳んでいると、ケイタイが鳴り出した。発信者は縫だった。つぐみはテレビを消すと「もしもと電話に出た。」

「先輩、さっきのメール、ホントですか」

予期していた通りの慌てた声が、耳元に流れてきた。つぐみは少しでもその話を後回しにしたい

「あれ早いね。まだパパの病院かと思ってた」

と話をそらした。

「病院でもケイタイOKの場所があるんですよ。それよりさっきのメール、ホントなんですか」

「ナエミンがフッキーに聞いた話だから、間違い無いと思うんだけ

ど」

「そんなあ。縫、今日根野先輩に告ってOKもらったばっかなんですよ」

思いもよらない縫の言葉につぐみはしばし絶句した。それは一体どういうことなのか。

「それ、ホント？」

「ホントです。今日の放課後、部活行く前の根野先輩をつかまえて告ったんです。そしたらすぐにOKしてくれましたよ」

「放課後……」

つぐみはつぶやきそして悟った。根野は今日の午後つぐみに告白したが、色よい返事をもらえなかった。そこに縫が現れ告白をしてきた。そこで根野は縫を受け入れることにしてつぐみに取り消しを申し出てきたのだ。告白後、突然取り消しをされた背後にはそういった事実があったのだ。

そういうことかとつぐみが納得していると、縫が

「根野先輩はホントは灰原先輩が好きなのに、振られちゃったから、たまたま告ってきた縫と、付き合うことに決めたってことですか」

と悲鳴のような声を上げた。縫にとっては天国から地獄に突き落とされたような心地だった。

「たまたまかどうかは分かんない。根野君は縫ちゃんのこと、好きなのかも知れないし」

「でも昨日の今日ですよね？ 根野先輩、軽いですよ。そう思いませんか？」

「まあ軽いと言えば、軽いかも知れないけど」

果たして自分が告白されたことも、伝えるべきなのかどうか迷いながら、つぐみは答えた。ひずるの件だけで縫がこれ程心を騒がせているなら、何もこれ以上の動揺を与える必要は無い気もするが、伝えるなら今がチャンスだという気もする。つぐみが迷っていると縫は

「とにかく縫、これから根野先輩に電話して聞いてみます」

と言い出した。

「聞いて認めたら、どうするの」

「根野先輩とは、別れます」

「じゃあ認めなかつたら、どうするの」

そう尋ねながらつぐみは、ここが正念場だと思った。縫の答えいかんによつては自分の出方も変えねばならない。縫はこう答えた。

「縫は、自分の好きな人を信じます」

その言葉につぐみは衝撃を受けた。何を信じるべきかという判断を、自分の好悪の情で決めてしまう幼い縫。その幼さを愛しく感じたこともあつた。だが今のつぐみにとっては縫のその幼さが煩わしいものに思えた。

自分が根野に告白され、そして取り消されたことは言うまいとつぐみは決意した。好きな人の言葉しか信じない縫にそのようなことを伝えても、親切が仇になるだけだ。良かれと思つて伝えたことで、疑われ恨まれてはたまらない。

縫との電話を切ると、つぐみは再び洗濯物を畳み始めた。ふと電話がすぐに済んだから洗濯物がシワにならずに済んで良かったなと思つた。こんな時に、冷静に現実的なことを考えている自分が不思議だつた。

けれど畳んだ洗濯物の中から貞子の物をより分け、貞子の部屋に入った時、もしも貞子だつたらどうしただろうという考えが、頭をよぎつた。

貞子はいつもつぐみに対し、違うものは違うと言い、いけないものはいけないと言つていた。そのことによつてつぐみの機嫌を損なうことなど全く恐れていなかった。

あたしは自分のことだけを、考えてしまつたんだろうか。縫に嫌われることを覚悟してでも、根野に告白されたことを伝えるべきだつただろうか。

急に自己嫌悪に襲われ、つぐみは思わずその場にしゃがみ込んだ。その時、頭の中で根野の「付き合つてくれないか」という声がこだ

ました。

あたしだって信じたかったと、つぐみは叫び出したいような気持ちに駆られた。あたしだって根野を信じたかった。根野の告白を信じたかった。

その時つぐみは悟った。自分は縫に嫉妬しているのだと。例え信用ならない相手であろうとも、好きな相手を信じられる縫に嫉妬しているのだと。

ふとうづくまる足元に、何か光る物を見た気がした。拾い上げるとそれは貞子のピアスだった。つぐみはまだピアスの穴を空けていないからこんなアクセサリーには縁が無い。羨望を覚えながら、つぐみはしばしピアスに見入ったが、ピアスはお前など用は無いと言いたげに、つぐみの手の中でよそよそしく輝いていた。

その輝きに見蕩れている内に、ピアスを空けてみたいという願望が、つぐみの中に生まれた。無くした恋の代わりに何かを手に入れたかった。四六時中、肉体に差し込まれている装飾品を手に入れたなら、その輝きが自分の喪失を埋めてくれるような気がした。

つぐみは貞子のドレッサーの鏡の前で、ピアスを耳元に宛がった。あどけない顔立ちの横で冷たく光るダイヤのピアスは、つぐみに全く不似合っていた。まるで母親のアクセサリーでいたずらをしている幼子のようにだった。

鏡の中に自分の幼さを見て取った瞬間、つぐみの唇から、「ママ」という言葉が零れ落ちた。母親に会いたいと思った。会って話したいことがあるの。なぜ生んだのかかそういうことだけじゃなくて話したいことがあるの。聞いて欲しいことが沢山あるの。ママ、ママ、どこへ行ったの。

母親を恋い慕いながら、つぐみは部屋の中で目を泳がせた。ベッドの上にもカーテンの前にもクローゼットの辺りにも、母親の姿は見当たらなかった。

ふと部屋の中が何やら雑然としていることに気付いた。ゴミ箱からはゴミが溢れ、ドレッサーの足元には、空になった化粧水の瓶が

転がり、読みかけの雑誌や小説が床に点々としている。このところ貞子は帰りも早かったというのにどうしたことだろうか。

だがその散らかった貞子の部屋が不思議に居心地が良く、つぐみはピアスを握り締めたまま、床にごろんと寝そべった。自分の心の中にも大人と子供が散らかっているのかも知れない。そんなことをふと考えた。

わたちの恋（後書き）

中学生くらいになると、世渡り上手で本心を隠す子が台頭してきますが、そういう子を文学に使うのはつまらんです。私は。

成績良くても無邪気で、だからこそ出生の秘密に傷付く姿が愛しいです。若さならではの感受性の鋭さを上手く描けているといいのですが。

夏の日（前書き）

初の三部作になりました。どうぞお読み下さい。

夏の日

頭の中が散らかっちゃって、夕飯の準備ができません。

先程、貞子のケイタイに送ったメールの文章を頭の中で反芻すると、つぐみは食卓の椅子に腰を下ろし、溜め息を吐いた。

浴室を掃除した辺りまではまだ良かった。頭をこんがらかせながらも、手はブラシをつかみバスタブを磨いてくれた。けれど夕飯の支度をしようと冷凍庫を開けた途端、つぐみは頭の中が溢れ返るのを感じた。あらかじめ冷凍保存しておいた、鮭の味噌漬けやらハンバーグやら茹でた小松菜やらの食材の情報を、頭がキャッチするのを拒んだのだった。

何を作ったら良いのか分からない。つぐみは途方に暮れ天井を仰いだ。こんな気分になったのは初めてだった。今までにも食事作りが億劫になったことはあったけれど、こんな風に、脳が食材の情報を捉えることを拒否したのは初めてだった。

頭の中が散らかっていると思った。大人と子供が散らかっているだけじゃない。もっと色々な沢山の物が散らかっている。片付けない。不要な物を捨てたい。頭が爆発してしまいそう。

その時、玄関の鍵が開く音がした。つぐみは走って玄関まで貞子を出迎えた。息せき切って出迎えに来たつぐみを見て、貞子は

「何だ。頭の中が散らかってるとかいうから何か落ち込んでるのかと思った。元気じゃん」

とのん気に笑った。

「元気じゃないの。頭ぐちゃぐちゃなの。伯母さん助けて」

「ちよつと待ってよ。サンダル脱ぐから」

「脱ぎながらでいいから、話聞いて」

慌てるつぐみに、貞子はマスカラを丹念に塗った目を丸くすると、少しつぐみの頭を冷やさせようと考え

「随分急いでるのねえ。伯母さんまだこれからバッグ二階に持って

行くわよ」

と階段を上りかけた。

貞子が背中を向けたことで、不意につぐみに勇気が生まれた。つぐみは階段を上る貞子の背中に向かって

「伯母さんあたしって、ママが強姦されてできた子なのよね？」
と尋ねた。

貞子は階段を上る足を止めると、ゆっくりと振り向いた。その顔には驚愕が張り付いていた。貞子は薄く形の良い唇を震わせ

「誰に、聞いたの」

と尋ねた。

「伯母さんが言ったんだよ。先月酔っ払って帰って来た日に。やっぱり覚えてないんだ」

「……もしかしてツツタンが、三日学校休んだ前の晩？」

「そう」

貞子は二階に行くことを諦めると、階段を下り居間のソファアに腰掛けた。こんな時なのに貞子は、ああパンツがシワになると考えていた。今つぐみに突きつけられた質問から心が逃避したがっていた。けれど貞子の体が貞子をここへ運んだのだ。もしかしたら心よりも体の方が誠実なのかも知れないと、貞子は思った。

貞子はずぐみにも座るよう促すと

「そうか。酔ってたとはいえ申し訳なかったね」
とうなだれた。

あの日は銀行で、貞子が課長代理に昇格したことをねたま先輩社員が、自分の陰口をたたいているのを聞いてしまい、いつになく深酒をしてしまったのだ。それなのに仕事とは無関係な正子の件が、口をつけて出たのはどういう訳か。正子が強姦された事実が自分にとって深層心理に食い込む傷だからか。だから嫌なことが起きた時にその傷が共鳴し、記憶を呼び覚ますのか。

整った顔を、これ以上ない程に歪めながら自問する貞子の姿を見て、つぐみはああ確定的だと思った。これまでつぐみは頭のどこか

で、自分が強姦によって生まれたなどということは酔った貞子の生み出した妄想で、自分はその戯言を、気に病んでいるだけではないかという希望的観測を持っていた。けれど貞子の態度によって、それは事実なのだつぐみは悟った。

「言っちゃった言葉はもう取り消せないからいいの。それより教えて。ママはどうしてあたしを生んだの？ どうして堕ろさなかったの？」

「正子は運命論者だったのよ。どんな過程であれ、自分の子供がお腹に宿ったんなら生むことが運命だって考える子だったの」

「おじいちゃんたちは、反対しなかったの」

つぐみは優しくかった祖父母のことを思い出しながら尋ねた。祖母も自分の呪われた出生を知って尚、自分を愛していたのだろうか。貞子は遠くを見るような目つきをすると

「おじいちゃんたちは強姦のこと、知らなかったからねえ」

と何かを諦めたような口調で答えた。もしも知っていたならば、彼らはおそらく何が何でもつぐみを堕ろさせたに違いなかった。

「じゃああたしが強姦で生まれたって、知ってるのは誰？」

「この世では、伯母さんとツツタンだけ」

「あたしの……、父親は？ 知らないの？」

つぐみは一瞬、彼のことを何と呼んだものかと言いよどみながら尋ねた。母親のことはママと呼んでいるのだから、父親はパパであるはずだった。事実それまでつぐみは自分の見たこともない父親のことをパパと呼んでいた。けれど強姦の事実を貞子が認めた今、つぐみは彼をパパと呼ぶことに、抵抗を覚えた。

つぐみの問いに、貞子は果たしてどこまで話したものと迷いながら

「ツツタンが生まれる前に死んじゃったから、ツツタンが生まれたことは知らないよ」

と乾いた声で答えた。

「ホントにあたしの父親は、あたしが生まれる前に死んでたの？」

「そう。ツツタンのパパとママが結婚してたっていうのは嘘だけど、パパがツツタンの生まれる前に死んだのはホント。ママがツツタン生んですぐ死んじゃったのもホント。でもツツタンのパパの両親が死んでるってことと、パパが一人っ子っていうのは出任せ。本当は伯母さんは、ツツタンのパパのことよく知らないの」

「あたし……、父親がホントに死んでるなんて思わなかったから、もしかして縫ちゃんのパパが、自分の父親なんじゃないかと思ってた」

思いもよらぬつぐみの告白に、貞子は「どういうこと」と固い声を出した。一体なぜ強姦の事実が西海とつながるのか、貞子にはさっぱり分からなかった。

「あたしママに似てないでしょ。縫ちゃんもパパ似だし。それで皆があたしと縫ちゃんのこと似てるって言うから、ひよっとしたら縫ちゃんのパパが、あたしの父親かも知れないと思って、伯母さん知らないで付き合ってたらどうしようって思ったの」

ようやくつぐみが告白を搾り出した。貞子は「そうかなあ」とつぶやいた。

「ツツタンと縫ちゃんて、似てるかなあ」

「えっ、伯母さんは似てると思わない？」

これまで縫と似ているという評価に、異を唱えた者に出会ったことが無かったつぐみは、心底驚いた。もちろん自分でも似ている自覚は無く、周囲の声に、翻弄されて似ているのだと思ひ込むようになったのは確かだが、実は自分は縫に似ていないのだろうか。

つぐみが考え込んでいると、貞子は

「確かにパツと見は似てるけど、でもパーツをじっくり見ると似てないよ。鼻の線とか唇や耳の形とか全然違う。同じ遺伝子には見えないよ。目元がちょっと似てるから、皆は『似てる』って言うんでしょ。人は目元で判断するから」

と冷静に答えた。

「伯母さん、随分じっくり観察してるね」

「縫ちゃんが初めてうちに来た時、何だか知ってるような顔だなあ
と思つて、それでチラチラ見たのよ。後で考えてみれば、西海の娘
なんだから知ってるような気がしたのも当たり前なのよね。あの子
は西海に生き写しだから」

そう答えながら貞子は、縫が西海に似ているおかげで、自分はど
れだけ救われただろうと考えた。もし縫が西海の亡き妻の面影を宿
していたら、自分は縫に亡き妻の姿を感じて耐え難かつただろうと
思う。妻がいたことを承知していたとはいえ、恋人の娘に亡き妻が
伝えたかばせを認めることは辛い。

貞子が西海の妻に思いを馳せていると、つぐみが言いにくそうに
「あのね、伯母さん」

と言つた。「なあに」と貞子は答えた。

「あたし縫ちゃんのパパが、自分の父親かも知れないって思つてた
から、縫ちゃんのパパのこと憎んでたの」

「あら」

「そしたら縫ちゃんのパパが、階段から落ちたり車に十円ビームさ
れたり、チンピラに絡まれたり事故つたりしたの。それでナエミン
が、誰かに恨まれてるんじゃないかって言ったの。誰かが誰かを恨
むと、その恨みのパワーで恨まれた人に不幸が起こるんだって言っ
たの。ねえ伯母さん。縫ちゃんのパパに次々と色んなことが起こつ
たのは、あたしが縫ちゃんのパパを、憎んでたせいかな」

不安そうに尋ねるつぐみを、貞子は可愛く思つた。実際に犯した
罪すら反省しない者もいるというのに、この子は自分の心が犯した
罪にすら心を痛めている。

貞子はつぐみの若さゆえの純粹さを好ましく思いながら

「ツツタンのせいじゃないわよ。階段から落ちた時も事故つた時も、
あの人酔つ払つてたのよ。十円ビームは誰の仕業か分かんないし、
チンピラに絡まれたのも理由は分かんないけど、少なくとも階段か
ら落ちたのと事故はお酒のせい。ツツタンは何も悪くないわよ」

と微笑んだ。

「そうなんだ。お酒って怖いね」

「怖いわよ」

「お酒のせいで伯母さん、あたしが強姦されて生まれたって言うちゃうしね」

つぐみの何気ない一言に貞子は大いに反省した。本当はその秘密は、棺まで持って行くつもりだったのだ。

貞子は罪悪感に駆られながら

「ごめんね。ホントは黙ってるつもりだったんだけど」

と謝った。中学生の身で自分が強姦によって生まれたなどと知り、つぐみはどれだけ辛かっただろう。

「伯母さんがあたしに対して、悪いって思うだろうと思ってたから、あたしも伯母さんにそのこと言うのやめようって思ってたの。伯母さん忘れてたみたいだったし」

「うん。申し訳ないけど綺麗さっぱり忘れてた」

「でもそのこと聞いてから、そのことに関連して色んなことがいっぱい起きて、もう黙ってるのが辛くなっちゃったの」

そう打ち明けながらつぐみは、少しでも心が軽くなっているのを感じていた。口にはしてはならないとは分かっているけど、秘め事を持ち続けるのはやるせない。もしかしたら貞子もずっと、悩ましい思いを抱いていたのではないかと思う。自分の出生の秘密を一人で背負い、悶々とした日々を送っていたのではないかと思う。だとしたら自分がそれを知り貞子に話したことは、ある意味貞子を救うような気がした。

だが貞子は、つぐみの言葉にドキリとしていた。「そのことに関連して色んなことがいっぱい起きて」とは何のことだろうか。このことを知る者は、今や自分とつぐみの他にはいないはずなのに。

貞子はおびえながら

「色んなことって、西海に起きたトラブル以外にも何かあったの」と尋ねた。自分が口をすべらせてから、知らぬ間に一ヶ月以上の月日が流れていたことが貞子には恐怖だった。

「あ、その前に伯母さんの彼氏を憎んでてごめんなさい」

「ああそれはいいのよ。西海とはもう別れたから」

「え、何で？」

驚くつぐみに、貞子はしまったと思った。つぐみの言う「そのことに関連して色んなことがいっぱい起きて」について聞こうと思っていたのに、つい余計なことを口走ったばかりに話が脱線してしまった。しかし貞子はすぐに仕方が無いと諦めた。西海と終わったことは、遅かれ早かれつぐみには話さなければならなかったのだ。何しろ西海の娘はつぐみと仲が良いのだから。

貞子は観念すると

「看護師とキスしてたのよ。あいつ」

と憎々しげに言い放った。つい数日前に自分の口元に押し当てられていた唇が、同じベッドの上で他の女の唇を愛撫していた事実、貞子は頭に血が上る思いをした。

「いつ？」

「一週間くらい前かな。だからいいのよ。あんな奴憎んでも。むしろ伯母さんの代わりに憎んで欲しいわ」

「伯母さん……、縫ちゃんのパパのこと憎らしい？」

ああだから貞子の部屋は散らかっていたのかと考えながら、つぐみは尋ねた。恋人と別れたショックから貞子は怠惰になり、自室の片付けを怠っていたのだ。

つぐみの質問に、貞子はちょっと考えてから

「そうね。憎いわよ。再会してから一ヶ月ちよつとだっというのにもう他の女に手出すんだもん。でも少しスッキリした気分もあるな。これでようやく昔の恋に区切りがついたというか。あの時は距離のせいで別れることになったと思うてたから、どっかで心の区切りがついてなかったのよね。伯母さんがずつと結婚しなかったのは、もしかしたらそのせいかも知れない。だからね西海に浮気されて、それでやつと心が自由になったような気もするのよ。もしかしたらこれから、本当の恋愛ができるかも知れないって気もするのよ」

と晴れ晴れとした顔で答えた。その生き生きとした表情を、つぐみはとても羨ましく思った。

「伯母さんて強いなあ。あたしの好きな人もすごく気が多たって今日知っただけで、あたしはとても、スッキリした気分になれないや」

「……中学生が気が多たってどういうこと？好きな子が沢山いるの？」

「根野君という男子なただけど、昨日ひずるちゃんて子に告って振られたらしいの。それなのに今日あたしに告ってきて、あたしがちゃんと返事しない間に、縫ちゃんに告られて、それであたしに告ったこと取り消してきたの」

こうして言葉に表してみると、根野はつくづくいい加減な男だどつぐみは思った。縫の父親といい根野といい男とは何といい加減なのか。いや誰よりも悪い男は自分の父親だ。つぐみは今更ながらに、父親の血をひく自分に嫌悪を覚えた。

つぐみが落胆していると、貞子は

「あらやだ。ツツタンと縫ちゃんて恋敵だったの」

と微笑みながら尋ねた。つぐみの複雑な心中を知らない貞子にとっては、仲の良い後輩と男を取り合う羽目に陥ったつぐみの姿しか、想像できなかった。

「恋敵じゃないよ。あたし縫ちゃんのこと応援してたから」

「どうして？ その根野君のことツツタンも好きだったんでしょ？」
「好きだったけどでもあたし縫ちゃんのこと好きだから、縫ちゃんのこと応援して、縫ちゃんにあたしのこと好きになって欲しかったし、あたしが恨んでたせいで、縫ちゃんのパパが入院したのかなって思ってたから、罪滅ぼししたかったし、それにどうせ強姦で生まれたあたしなんて、根野君が好きになっってくれるはず無いって思ってたし、だからどうせ根野君が、あたし以外の人と付き合うなら、あたしに顔の似てる縫ちゃんにして欲しいと思ったの」

そう言っって肩を落とすつぐみを見て、貞子はようやく、つぐみの

言う「そのことに関連して色々なことがいっぱい起きて」を理解した。つぐみはただ一人で、自分の心と戦っていたのだ。

貞子がつぐみを憐れみながら

「ツツタンが強姦で生まれたってことを、根野君は知らないでしょう？」

と優しく尋ねた。知られていないコンプレックスを苦しめて、恋を諦めようとしていたつぐみが不憫だった。

「知らないけどでも、事實は事實でしょ」

「ツツタン。ツツタンは若いから男女の恋愛を神聖視しすぎてるのよ。強姦なんて夫婦の間でも起こるのよ？ ちゃんとした夫婦だって、その都度お互いの了承を得て愛のあるセックスしてるなんて限らないの。そうやって生まれた子なんて、世の中にゴマンといるのよ。だから自分が強姦で生まれたからって全然コンプレックスに思うこと無いのよ」

「そうなの？」

確かに自分は恋愛を神聖視しすぎていたかも知れないと考えながら、つぐみは尋ねた。例えば浮気一つにしても、そんなことをする人は特別な悪人だと思っていたが、貞子の恋人がつい一週間前にしたという。そして自分の焦がれていた根野にしても、あまりにも節操が無さ過ぎる。

ひよっとしたら世の中というものは、自分が考えていたよりも、軽いのではないだろうか。夫婦や恋人の愛というものは、もっとしつかりしたものだと思っていたが、ひよっとしたらもっと、軽くゆるいものなのではないだろうか。

自分の中に構築していた世界と、実際の世界の感觸の狭間で揺らぎながら、つぐみが考え込んでいると、貞子は

「そうよ。大体今なんて四組に一組が離婚してる時代なのよ。その時愛のあるセックスをしたと思って生まれた子だって、後になつてみれば、あれは本物の愛じゃなかったって思われちゃうのよ。本当の愛によって形成される人間なんて実はごく少ないの。だからツ

ツタンは、自分の生まれにコンプレックス感じる必要全然無いの」とまくし立てた。

「でも本当の愛によって生まれる人がすごく少ないなんて、何だか悲しいね」

「恋愛って難しいからね。惚れた当初は、自分にとって都合のいいことしか信じようとしなないし。それで月日が経って、ようやく相手の欠点を認識して耐えられなくなって別れてなんてケースは、世の中にいっぱいあるからね」

「縫ちゃんも今、自分にとって都合のいいことしか見えてないかも知れない。根野君が昨日、ひずるちゃんに振られたこと教えてあげたのに、縫ちゃんは自分の好きな人のことを信じるって言うの」

貞子の話を聞いて、つぐみは不意に不安になってきた。あれから縫からは連絡が来ていない。根野は一体何と言って縫に釈明したのだろうか。

つぐみが縫のことを気に病み始めていると、貞子は

「ツツタンが告白されてすぐ取り消された話は、縫ちゃんにしてないの」

と尋ねた。さすがにその話をすれば縫も真実に気付くような気がした。

「縫ちゃんが自分の好きな人を信じるって言ったから、言うだけ無駄かなと思って言わなかったの。下手なこと言って、逆恨みされるのも嫌だったし。でもあたしずるかったかな。縫ちゃんに嫌われるの覚悟で言うべきだったかな」

「もし相手が縫ちゃんじゃなくて、ナエミンだったらどうした？」

「ナエミンにだったら言ったと思う。ナエミンはそんなことで、逆恨みする人じゃないから」

その時つぐみはあつと思った。逆恨みをあれだけ心配していたのは、縫は逆恨みをする子かも知れないという思いが、心のどこかにあったからだ。自分は縫と仲良くなりたくないと思えば、根野との恋を応援していながらも、縫を心のどこかで信頼していなかったのだ。

縫に対する自分の思いを確認しつぐみが愕然としてみると、貞子は「だったらいいんじゃないの。縫ちゃんとは知り合って一ヶ月ちょっとだし、まだ信頼関係が築けてるとは言えない段階でしょ。半端な人間関係の時は、迷った時は口をつぐんでるのが賢いやり方よ」と大人の意見を言った。

その時つぐみはふと思いだたり

「ねえ伯母さん。あたしの名前って誰がつけたの？」

と尋ねた。貞子はぎくりとしたが顔には表さず

「正子がつけたのよ」

と嘘をついた。

「何で、つぐみってつけたの」

「正子が女の子の名前はひらがなが可愛いからって、生まれる前から考えてたのよ」

「そっか。あたしはてつきり強姦によって生まれたから、その件に關して口をつぐんでるって意味でつけられたのかと思った」

凶星だったため、貞子は思わず不自然な笑い方をした。その名前は本当は貞子がつけたのだ。正に今つぐみが想像した通りの謂れで、後ろめたさから思わず貞子をつぐみを抱きしめた。その感触に、つぐみはふと母親のことを思い出した。自分を生んで間も無く他界した母に、抱かれたことがあるのかどうかは分からない。けれどシヤツ越しに感じた貞子の柔らかな皮膚と温かい体温は、母親のそれである気がした。

貞子をつぐみを抱きしめたまま

「ツツタンは一ヶ月以上もずっと、一人で苦しんでたんだねえ」

とつぐみをねぎらった。つぐみは目をつむったまま、貞子の言葉に耳を傾けていた。何だか甘く心地好い匂いがした。

「縫ちゃんのパパのことを恨んだり辛かっただろうねえ。ツツタンがぐれなくて、ホントに良かった」

「ぐれるって、どういうこと」

「そうねえ。髪を染めたりパーマをかけたりピアスを空けたり」

昭和時代に中学生生活を送っていた貞子は、とりあえず当時のス
ケ番像を想起しながら答えた。あの当時は服装の乱れは心の乱れと
言われたものだ。

つぐみは何だかピンと来ないまま

「それは高校生になってからでいいよ。あたしまだ似合わないし」
と答えた。貞子のピアスの大人びた輝きは、まだ十三歳のつぐみ
には不釣り合いなものだった。

「あとは学校や、部活をサボったり」

「だって大学まで行かせてくれるって言われてるのに、学校サボっ
たら困るでしょ。部活だってあたしが行かなきゃ、縫ちゃんに教え
る人誰もいないし」

「でもくれる人っていうのは、周囲の迷惑考えないで好き勝手する
ものなんだよ」

貞子の答えにつぐみは、あたしは多分ぐれるという直接的な行動
を取る代わりに、縫の父親を恨むという選択をしたんだろうなと、
漠然と思った。そのどちらが望ましいことなのかは分からないけれ
ど、縫の父親を恨んだ件は後味が悪かった。もうあんな陰湿なこと
はすまいと思う。

つぐみがそう決意していると、貞子は

「ツツタンが良い子でホントに良かった。辛いことがあっても道を
それないことは、本人にとって宝だよ。偉い偉い」

とつぐみの頭をくしゃくしゃと撫でた。本当に自分は、道をそれ
なかったのだろうかとつぐみはいぶかしんだが、貞子の機嫌が良い
ならそれに越したことは無く、貞子のするがままに任せていた。

貞子はしばらくつぐみを可愛がると

「さあて遅くなっちゃったけど、ご飯作るかな」
と立ち上がった。

「え、今日当番あたしなんだからあたしが作るよ」

「いいって。今日は伯母さんが失言のお詫びに作るから。ツツタン
はお風呂入っちゃいなさい」

「はい」

返事と共に、つぐみが浴室に消えていったのを確認すると、貞子は流し台に寄りかかってフツツと息を吐いた。とりあえず父親の死因をつぐみに尋ねられなかったのが、不幸中の幸いだった。

父親は実は正子が殺したのだ。とはいえ直接手を下した訳ではない。父親は交番に勤める警官だった。それを知っていたから、正子は来る日も来る日も交番に通い、交番前の道端の窓ガラス越しに彼と目を合わせては、意味ありげに腹を撫でてみせた。その腹が次第にふくれてゆく様を見て追い詰められた彼は、拳銃自殺をしたのだ。

今思えばそれは、正子なりの復讐だったのかも知れない。だが正子は彼が自殺するとまでは考えていなかったようだ。彼が自殺した後、正子は切迫流産になりかかり絶対安静の中で早産でつぐみを産み落とし、そして死んだ。

こんな話を、なぜつぐみにできるだろうか。それでも正子がつぐみを墮ろさなかったのは、復讐のための手段だけではなかったと、正子の心のどこかには母性本能もあったのだという貞子の希望的観測には、何の根拠も無いのだ。けれどいずれつぐみに父親の死因を尋ねられる日は来るだろう。その日何をどこまで話すべきか、貞子は考えておかねばならない。

浴室から湯を使う音が漏れてきた。はちきれんばかりの十三歳の肌は、流れる湯を肌にくすぐずとまとわりつかせるようなことはせず、弾くように流してしまふことだろう。けれどつぐみに全てを打ち明けなかった貞子は、心にすぎきれないしこりを残していた。いつそ全てを洗い流してしまえば良いのと思う。しかしそれはできない相談だ。それが人を育てるということなのだから。

貞子は深呼吸をして気持ちを整えると、冷蔵庫を開けた。手早くできて成長期のつぐみにとってふさわしい旬の食材はどれだろう。冷蔵庫の中を眺めながら貞子は、先程のやり取りもこういった日常の行為も全て、人を育てるといふことなのだと、しみじみと考え

た。

とびつきりの太陽の下の、夏休み中の市民プールは、水着と水しぶきでごった返している。つぐみは人の間を縫うようにしてクロールで泳いでいた。

やっぱり学校のプールの方が良いと思う。学校でなら飛び込みができるから、飛び込んでから水面に浮かび上がるまでの、不思議な浮遊感を堪能することができるし、人の間を掻き分ける必要も無いから、泳ぎに集中できる。賑わった市民プールでは五十メートルを泳ぐのがせいぜいだ。

つぐみは肩で息をすると、泳ぎで疲れたのやら、人で疲れたのやら分からないと思いつつプールから出た。1コースではまだ縫が平泳ぎをしている。綺麗な形で平泳ぎをする縫を見ながらつぐみは似てないところあったじゃんと考えていた。つぐみはクロールは得意だが、平泳ぎでは二十五メートルすら泳ぐことができない。

プールサイドで体育座りをしながらぼんやりしていると、プールから上がった縫が近づいてきた。スポーツ用の水着の胸が、水を滴らせながらたわわに揺れている。似てないところあったじゃん。つぐみは再度考えながら、体を少し前に倒し貧弱な胸を隠した。

「駄目ですねえ。混んじゃって」

と言いつつ縫はつぐみの横に座った。「全くね」と膝小僧にあごをくっつけたまま、つぐみは同意した。つうと水滴が首筋を走りつぐみはひやりとして身を固くした。

しばらくつぐみと縫は黙って目の前の景色を眺めていた。歓声の中、人々が泳ぐ様や、映った入道雲が乱され散り散りになっていく眩しい水面を眺めると、現実から浮遊しているような気分になつてくる。これはありふれた夏の日だ。どこにでもあるようなありふれた夏の日。

その時突然、縫が

「先輩の伯母さん、パパと別れたそうですね」

と言い出した。現実の世界に呼び覚まされたつぐみは縫の方をチラッと見ると

「そうみたい。これで縫ちゃんも一安心でしょ」

と嫌味に聞こえないように、声のトーンを工夫して答えた。

「安心じゃないですよ。もう新しい女がいるんですから」

「そうだったね。看護師さんだっけ？ その人と始まったから伯母さん別れたんだよ」

「いえ看護師さんとはもう終わっちゃって、今は検査技師の人と付き合ってます」

あまりのめまぐるしさにつぐみが口をポカンと開けると、縫は

「実はうちのママって、病気で亡くなっただって言いましたけど、それって半分ホントで半分嘘なんですよね。ママは自殺したんです。

パパの浮気があんまり酷かったから鬱病になってそれで」

と淡々と説明した。

つぐみは目を見開くと

「縫ちゃん、シヨックだったでしょう」

と縫をいたわった。自分の親が自殺などしてしまったら、どれだけ衝撃を受けることだろうと思う。

「シヨックでしたよ。だから縫パパに再婚して欲しくなかったんです。散々恋愛して楽しんでその拳句ママを死なせておきながら、違う人と結婚するなんて、ママがあまりに可哀想って思ったんです。

それでパパに言ったら、『女を整理するために転勤願い出す』って言ってそれで引越すことになって。それなのに引越し先の昔の女と復縁なんて、何考えてんだか分かんないですよ。だから先輩の伯母さんのこと反対したんですけど、結局その後、看護師、検査技師って続いて何だかもうどうでも良くなっちゃいました」

「パパが再婚しても、いいってこと？」

縫は悪い子になってしまふのだからかと心配しながら、つぐみは

尋ねた。父親を再婚させないために悪い子にならないと言っていた縫が、父親のことをどうでも良くなった今、縫は悪い子になってしまふのだろうか。

つぐみが不安な目で縫を見詰めると、縫は

「いえ、これだけサイクルが短いこと考えると、おうちの中さえがたついてなければ再婚はしばらく無いのかなあって気がして。考えてみればママがいた間も、パパの浮気相手はしょっちゅう入れ替わってたんですよ。それにパパ、ママが亡くなってからもマリッジリングは外さないし、ママのこと苦しめてはいたけど、でもパパにとってママは特別な存在だったのかなって気がして。だったら特別な相手って、そうそう出てこないんじゃないかなみたいに思ってた」と疲れた顔で答えた。父親に恋人ができる度にやきもきすることに、縫はくたびれたのだった。

「でもその考えに行き着くまでは、大変だったでしょう」

「大変でしたよ。一人で散々悩んで出した結論です。根野先輩は全然、縫の悩み聞いてくれないし」

「えっ、根野君結構冷たいね」

つぐみは根野の彫刻刀で彫ったかのような、鋭利な表情を思い起こした。あのシャープなかんばせが、触れたら凍傷を起こしてしまいたいそうな、冷たい雰囲気が好きだった。けれど本当に冷たい男などごめんだと、つぐみは思った。

根野の冷酷な無関心さにつぐみが悪寒を覚えていると、縫は

「本当に冷たいんですよ。あの男は。灰原先輩のこと聞いた時もすつごい不機嫌になっちゃうし。縫の不安な気持ち全然考えてくれないわ。それで縫の悩みは聞いてくれないわ、根野先輩が灰原先輩に告ったって噂、よそからも聞くわでもう嫌になっちゃって、昨日別れました」

と忌々しげに言い放った。

「別れたんだ」

「別れました。根野先輩で、つぐみ先輩と仲いいくらいだから、も

少しマシな男かと思ってたんですけどね」

「別に仲良くないよ。席が隣だからしゃべるだけで」

否定しながらつぐみはそうか別れたのかと考えていた。縫が根野と別れたのなら、根野の告白を、再度検討することもできるのだと思っただ。根野ははつきりしないつぐみに業を煮やし好意を寄せてきた縫と付き合い始めたのだから、縫が去った以上、再びつぐみは土俵に上がれる可能性が生まれたのだった。

けれどつぐみの心は冷えていた。いつの間にか根野に焦がれる気持ちは消えていた。

目の前の、生まれては消える水しぶきを眺めながら、つぐみが恋のはかなさを味わっていると、縫が

「そうなんですか？ 縫もしかしたら根野先輩は、つぐみ先輩のと好きなんじゃないかって思っていました」

と言い出した。

つぐみはドキリとして縫の目を見詰めたが、やがて視線をそらすと告白はされたよ。縫ちゃんが根野君に告る何時間か前に

と打ち明けた。もう縫が根野と別れたのなら言ってしまうても良い気がした。

「えっ、今までどうして教えてくれなかったんですか」

「縫ちゃんが、自分の好きな人を信じるって言ったから」

「だって縫、つぐみ先輩のこと好きですよ」

縫の言葉につぐみは沈黙した。水を弾く音に混じって人々の歓声が聞こえる。しばしの時間が流れた。やがてつぐみは

「じゃああの時、ひずるちゃんのことを教えたあの時、あたしがそう言ったら縫ちゃんは信じたってこと？」

と尋ねた。

「信じました。……根野先輩ともすぐに別れたと思います」

「じゃああたしのせいで、縫ちゃんは根野君とすぐに別れられなかったんだ」

「いいんです。縫、彼氏って欲しかったから。いいんです。それは。

でも……、教えて欲しかったです。縫、つぐみ先輩が直接告られたって言うんなら信じたから。灰原先輩のことはつぐみ先輩の又聞きだったから信じられなかっただけで、先輩が直接告られたって言うんなら、信じられたから」

そうだったのかとつぐみは思った。縫は自分を好いてくれたのだ。それなのになぜ自信が持てなかったのだろう。自分が強姦により生まれたからか。だから自分に自信が持てなかったのか。

つぐみはまぶたを閉じた。脳裏に写真でしか知らない母親の姿が浮かぶ。見たことのない父親の姿が浮かぶ。

バイバイ、ママ。バイバイ、パパ。あなたたちがどうやってあたしをつくったのかあたしには関係ない。あなたたちがあたしの出生を望んでいたかなんてどうでも良い。どんな事情があったにしろ、あたしは生まれちゃったんだもの。だったらどうせなら楽しく生きるわ。

つぐみは縫の顔を見た。濡れた眉毛がうねって、張りのある目の上にぺったりと張り付いている。つぐみとは違ううねり方だった。ここにいるのはつぐみと血のつながらないつぐみの後輩だった。

つぐみは縫を愛しく思いながら、

「ごめんね。でも信じてくれるのは嬉しいけど好きだから信じるってどうだろう。好きな人だって、自分に嘘つくかも知れないよ」

と言った。妹ではなくても血が繋がっていなくても縫はつぐみの可愛い後輩だった。

「それは今回感じました。根野先輩も最初は灰原先輩に告ってないって言ってたし」

「自分の好き嫌いの感情じゃなくて、信用できそうな人を、信じた方がいいんじゃないかな」

「でも誰が信用できるかと考えるのって、難しそうですよね」

縫が困った顔を見ると、つぐみは

「これからでしょ。あたしたちは。これからいっぱい色々な人に関わって見る目つけていくんだよ」

と笑った。

「その過程できっと、いっぱい傷付きますね」

「でも多分、人はそうやって勉強してくんだよ」

「縫、分かんないことだらけですよ。例えば根野先輩はどうして、急に恋に目覚めたのかとか」

縫の疑問を背中で受けながら、つぐみは立ち上がると

「知らない。夏だからじゃないの」

という言葉を残してプールに足から飛び込み、水を大量にすくって、プールサイドの縫にかけた。

「ひっどーい。何するんですか」

「嘘つき男と、付き合ってた罰」

「何ですか。それ。意味分かんない」

叫びながら縫もプールに飛び込んだ。二人は笑い声をあげながら水をかけ合った。きらめく水しぶきがひんやりと綺麗だった。水しぶきの向こう側で、歓声を上げる人々が愛しかった。頭上で輝く真夏の太陽がありがたかった。

つぐみは幸せだと思った。ありふれたこの夏の日を幸せだと思った。

夏の日（後書き）

二年前に執筆した作品です。当時は随分、残酷なものを書いていたんだなと読み返しながら思いました。

作品にしてしまうと忘れてしまうこともあるけれど、思いついたということは、私の中にこういう残酷さがある訳です。こつやっつて形になったものを読み返すことは、忘れていた残酷さを突きつけられたような気分です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5682u/>

かんばせ

2011年7月11日03時29分発行